# 虚堂智愚の住持期の動静（三）

佐藤秀孝

## 宰相呉潜との確執を伝える史料

智愚は明州（浙江省）鄞県の阿育王山広利禅寺に入寺するや、禅宗五山第五位の住持として学人接化に努めており、近隣諸山の住持長老らとも積極的に道交を結ぶなど、それまで霊隠寺鷲峰庵に隠山閑居していたときの久しい眠りを醒ましたかのごとく意欲的な活動を展開していたわけである。しかしながら、そんな矢先、住山して三年目に当たる宝祐六年（一二五八）のこと、智愚はその人生の根幹を覆すような一つの事件に遭遇し、再び住持職を退くことになる。智愚の「行状」によれば、

三年、呉制相信レ讒懐レ隙、辱レ師欲レ損二其徳一。師怡然自若、始終拒抗、略無二変色一。聖旨宣諭釈放。作レ偈奉レ謝云、去時暁露消二袢暑一、帰日秋声満二夕陽一、恩渥重重何以報、望二無レ雲処一祝二天長一。（大正蔵四七・一〇六四a）

と記されており、官僚の呉制相との間で不和が生じたことを伝えている。その事件は智愚が阿育王山に住持して三年後に勃発しており、呉制相が人の中傷を信じて仲違いを懐き、智愚を辱めて徳を損なわしめんとしたとされる。この呉制相による激しい仕打ちに対し、智愚は泰然自若として平生を装いつつも常に拒み抵抗していたものらしい。法嗣の閑極法雲としては、何としても智愚の「行状」にこの事件の一端を書き残し、権力者の横暴に屈しない禅匠の姿を称えたかったのであろうか。もっとも「行状」に記された内容のみでは智愚が如何なる事件に巻き込まれたのか、その真相などが判然としない。

一方、元代に明州出身の袁桷（字は伯長、清容居士、一二六六―一三二七）も『清容居士文集』巻三一「墓誌銘〈塔銘附〉」の「定水源禅師塔銘」において「其師愚公持二正議一、不三肯下二宰相呉潜一。潜怒繋レ獄辱レ之」と書き残している。定水源禅師とは智愚の法を嗣いだ宝葉妙源（晋之、一二〇七―一二八一）のことであり、妙源の本師である智愚が正しい言論を堅持して宰相呉潜という人に阿らなかった気概とそのために獄に繋がれた事件を特筆している。同じ袁桷が編集した『延祐四明志』巻一六「釈道攷」の「僧妙堪・

智愚・妙源」の「智愚」の項でも、

智愚少游方、得二法於運菴一。為二偈頌一善出二新意一、辨説鋒湊。叢林推レ之主二育王一。呉丞相潜、判二慶元一極尊二敬之一、問曰、師語録願序引以伝二不朽一。愚謝レ之。帰語レ人曰、呉潜晩歳如二病レ風人一、禍将レ至レ吾、豈願二其文一耶。語聞二於呉一。呉大怒、械二於獄一以二他罪一杖レ之。未レ幾、呉敗貶死。愚時年八十、詔主二径山一。

とあり、両者が不和となった理由などを若干ながら伝えている。これらの記載を併せ考察することにより、その間の事情もいくぶん明確になってこよう。そもそも禅者の「行状」や「塔銘」に特定の官僚士大夫などを名指しで批判した記事は載せられないのが通例であろう。それをあえて法雲は智愚の「行状」で個人名を挙げて書き残しているところにこの事件の重大性が潜んでいよう。

智愚の「行状」に載る呉制相とは、当時の宰相（制相）かつ慶元府主を務めていた呉潜（字は毅夫、号は履斎、一一九六―一二六二）のことを指している。『宋史』巻四一八の「列伝」一七七に「呉潜」として詳しい伝記が存しているが[1]、それによると呉潜は宣州（安徽省）寧国県に秘閣修撰の呉柔勝（字は勝之、一一五四―一二二四）の季子に生まれており、嘉定一〇年（一二一七）に状元進士となっている。諸要職を歴任した後、淳祐一一年（一二五一）に呉潜は参知政事となり、右丞相兼枢密使を拝している。さらに五年を経て宝祐四年（一二五六）には沿海制置司を授かって慶元府主となっており、『延祐四明志』巻二「職官攷上」の「宋」によれば、

陳昉。集英殿修撰知慶元軍府兼沿海制置使、宝祐三年四月。
呉潜。観文殿大学士沿海制置大使判慶元軍府、宝祐四年四月。
余晦。知慶元府兼沿海制置使、開慶元年十月。復宝章閣待制。
姚希得。敷文閣待制知慶元府兼沿海制置使、景定元年四月。

と呉潜の前後の明州慶元府の府主を載せている。当時、慶元府主は陳昉が宝祐三年（一二五五）四月から務めており、この人はすでに触れたごとく智愚が阿育王山に住持する際に宝祐四年（一二五六）春頃に拝請する疏文を撰したことで知られる。この陳昉に代わって宝祐四年四月から慶元府主に着任したのが呉潜であり、つぎの余晦が慶元府主に就任したのが開慶元年（一二五九）一〇月のことであるから、その直前まで呉潜が在任していたことになろう。したがって、呉潜は宝祐四年四月から開慶元年一〇月直前まで慶元府主として南宋水軍を統括する沿海制置司の地位に在ったわけである。

## 呉潜と浙江禅林

呉潜は当時の禅宗界に対してもかなり外護をなした崇仏の官僚士大夫であったと見られ、『径山志』巻一一「外護」の「呉潜」の項によれば「序二大慧正法眼蔵一、于二法門一得二大自在一」とあり、楊岐派（大慧派祖）の大慧宗杲（妙喜、大慧普覚禅師、宣州花木瓜、一〇八九―一一六三）が南宋初期に編纂した『大慧正法眼蔵』三巻が重刊されるのに際して序文を寄せたことを伝えている。『径山志』巻四「序文」には実際に「呉潜〈字毅夫、宋相国〉」の項に「正法眼蔵序」として、

　此事亙レ古亙レ今、漫レ天漫レ地、端視側視、直視横視。開視闔視、明視暗視、無レ不レ視亦無レ所レ視、亦無二無レ不レ視無レ所レ視。謂正即離、謂法即塵、謂眼即繫、謂蔵即塞。是故這四箇字、直須レ撇二向太洋海裏一、方免丙担レ枷帯レ索、受乙人圏禤甲。然二雖如レ此、初機鈍根、也要得二一則半則胡言漢語一、覷来覷去、綻二些光景一。此時正好、拚レ命捨レ身、単鎗直進、如三老鼠入二牛角一、挨レ牆拶レ壁、更無二去処一。正迷悶中、猛忽地頭破額裂、通身流レ汗、得二箇休歇一、始知二法眼慧眼天眼仏眼只是一双凡眼一。到二這裏一、説二道学人事畢一也且未在。履斎老子即説レ偈言、若以レ色見レ我、以二音声一求レ我、是人行二邪道一、不レ能レ見二如来一。

という呉潜が撰した序文の文面が載せられている。[2] おそらくそのとき刊行された『大慧正法眼蔵』には呉潜が揮毫した際の年月日、彼の肩書きと落款なども存したはずであろうが、その部分は残念ながら『径山志』では略されている。ただ、「履斎老子、即ち偈を説いて曰く」とあるなど、呉潜は大慧宗杲の看話禅に傾倒し、あたかも禅者のごとき気概をもって序文を寄せていることが窺われる。

また呉潜は楊岐派の無門慧開（仏眼禅師、一一八三―一二六〇）と交流が深く、杭州銭塘県の霊洞山護国仁王禅寺の住持であった慧開を本師と仰ぎ、官僚としての職務の傍ら参禅学道にも努めていたものらしい。『無門開和尚語録』「偈頌」には「賀二呉丞相生日一」（卍続蔵一二〇・二六二b）と「呉尚書尊堂死、以レ偈問レ師、用レ韻以復」（同・二六二c）および「呉履斎以レ脚蹈二日影一索レ偈」（同・二六二c）といった一連の偈頌が載せられており、「真賛」にも「履斎枢相鈞容」（同・二六三c）と題する頂相賛が残されている。呉潜は久しく慧開の人柄に接して政務の傍ら坐禅辦道にも努め、慧開もかなり親身に呉潜と交遊したものらしい。[3]

さらに大慧派の物初大観（一二〇一―一二六八）が『物初賸語』巻二四「西厳禅師行状」において、

　天童虚レ席、朝命二諸禅公挙一、以二師名一奏、特差補処。五年間、訓レ徒起レ廃、靡レ不レ加レ意。両閣後先、金碧昂霄、又将レ広二選仏場一、而一二新之一。回禄煽レ災、半日而尽、非レ数也耶。師迸二境順処一、不三以レ災故而弛二叢規一。衲子不レ忍レ舎、徳清・智淵・如月輩、占レ路分レ衛、助二厥興復一。

首新二施檀林一、而庫司厨廡諸寮、亦次第就、水陸堂已掄レ材。俄属レ疾、謁二告於制相履斎呉公一、以二蔣山別山智一、奏継二其席一、法中友子也。

と書き残しているから、明州鄞県の天童山景徳禅寺では回禄を経て復興に尽力していた破庵派の西巌了慧（一一九八―一二六二）が病いを理由に住持の座を退く際、丞相の呉潜に謁して同門の別山祖智（智天王、一二〇〇―一二六〇）を後席に推挙したことを伝えている。呉潜は了慧の意向も受けて同じ無準下の祖智を新たな住持として招き、祖智は呉潜らの外護を得て天童山の伽藍を復興している。(4)

『偃渓和尚語録』巻下「偈頌」に「上二履斎呉丞相一」（卍続蔵一二一・一五一a）と題した二偈が存しているから、大慧派の偃渓広聞（仏智禅師、一一八九―一二六三）も丞相の呉潜に偈頌を呈するなど交流が存している。(5) また『断橋和尚語録』巻末「行状」に、

景定庚申、大丞相履斎呉公、召レ師翌日見。而夜夢三老僧奮レ臂対二其説法一。公退レ朝、及レ見レ師、謂其只知二涅槃臺上工夫一。公喜甚、館留竟日。師直然忘レ形、斂レ袖議論、与二夢中老僧一肖焉。自後扣請益勤、致レ礼益重。（卍続蔵一二一・二二三b）

と記されていることから、景定元年（一二六〇）に丞相の呉潜が破庵派の断橋妙倫（松山子、一二〇一―一二六一）を召して相見しており、妙倫を参禅の師匠と仰いでいたことが知られる。妙倫は智愚とは参学期以来の法友であり、当時は杭州銭塘県の浄慈報恩光孝禅寺に住持しており、すでに最晩年を迎えていた時期に当たる。とりわけ政争に敗れて朝廷を退いた直後の呉潜にとって、妙倫が精神的な主柱となっていたらしい状況も窺われる。

このように呉潜は当時の著名な禅者らと親しく交友していることから、呉潜と智愚との間柄も初めから険悪な状況にあったわけではないであろう。『延祐四明志』には「呉丞相潜、慶元を判めて極めて之れを尊敬す」と記されるように、呉潜も丞相かつ明州慶元府主として阿育王山の智愚を高く尊崇し、親しい交友関係を保っていたものらしい。

物初大観は『物初賸語』巻二五の「上二制使馬観文一」と題する書簡の写しにおいて、つぎのような一文を書き残している。

某等竊観二先世成憲一、三宗住持之出、率由二公挙一。而公挙之行、四明為レ最。前後之所レ行者、固未レ容二縷数一。若二前政節斎陳尚書・履斎呉丞相・橘洲姚尚書之所レ行、皆集二諸山于僧司一、令二各宗従レ公保レ挙。履斎則集二諸山于僉廳一、命二三府判一、監臨二十名一拈二三甲一。而履斎又於二三中一親拈二其一一、而始給レ帖。厳二其事一也如レ此。

某等、竊かに先世の成憲を観るに、三宗住持の出づること、率ね公挙に由る。而して公挙の行わるるは四明を最と為す。前後に行なう所の者、固より未だ縷数を容れず。前政の節斎陳尚書・履斎呉丞相・橘洲姚尚書の行なう所の若きは、皆な諸山を僧司に集め、各宗をして公に従って挙を保せしむ。履斎則ち諸山を僉庁に集め、三府の判に命じて、監は十名に臨んで三甲を拈ぜしむ。而して履斎又た三中に於いて親しく

其の一を拈じて、始めて帖を給す。其の事を厳しくするや此の如し。

制使の馬観文（馬廷鸞か）が如何なる人物かは定かでないが、ここには呉潜（字は履斎）とともに陳防（字は節斎）や姚希得（字は逢原、橘洲、?―一二六九）の名が載せられており、当時、四明（明州）を中心に教律禅の三宗の住持を公選で任命していたこと、その住持の任命法を呉潜らがより厳格にしたことなどが記されている。陳防が「慶元府請疏」を製して杭州霊隠寺の鷲峰庵に閑居していた智愚を阿育王山の住持に拝請した際も同様であったはずで、呉潜らもこれに異存なく拝請に加わっていたことであろう。

## 智愚が呉潜と不和になる

ところが、こうした中で阿育王山の智愚を取りまく状況は一つの事件が勃発することによって一変している。『延祐四明志』の「智愚」の項によれば、あるとき呉潜の方から智愚に対して「師の語録、願わくは序引して以て不朽に伝えん」と願い出ており、智愚の語録に自ら序文を付して後世に伝えたい意向を告げたとされる。おそらく阿育王山の住持として智愚が明州慶元府城に赴き、府主の呉潜のもとを訪れた際に呉潜の方から告げられたものであろう。智愚の語録とは『虚堂和尚語録』にほかならず、おそらくこのとき『虚堂和尚語録』を編集刊行せんとする作業が阿育王山において進められていたものらしい。実際に智愚の語録は生前に門人らによってまとめられた前録の部分と、示寂して後にまとめられた後録の部分とに分かれていることから、ここでは前録に当たる部分を編集刊行している際に起こった事件ということになろうか。

この呉潜の申し出に対して「愚、之れを謝る」とあるから、智愚は何故か丁重に辞退したことになっている。もし智愚がこのとき呉潜の申し出を快諾していたならば、あるいは現今の『虚堂和尚語録』の前録部分の冒頭には呉潜が撰した序文が載せられていたかも知れない。[6] 阿育王山に帰山した際、智愚は呉潜の申し出を辞退した理由として「呉潜は晩歳、風を病む人の如し、禍い将に吾れに至らんとす、豈に其の文を願わんや」と人に語ったとされる。このように元代の袁桷は『延祐四明志』において、語録に序を付す付さぬの問題から智愚と呉潜の間に不和が生じ、関係が悪化していったと書き残している。ここに「病風人」とあるのは、風顕病の人すなわち精神の平衡を失っている人、精神的障害を患っている人といった意味であり、かなり差別的な意味合いを滲ませた表現であるといってよい。智愚が実際に呉潜のことを精神的に問題があると人に語ったのが事実であったか否かは定かでないものの、これを伝え聞いた呉潜は智愚が悪言をもって謗り傷つけたとして怒り心頭に達し、智愚との仲違いを断行し、あまつさえ

智愚を牢獄に繋いで屈辱的な言句をもってその徳を損なわしめんと画策したという。

この事件の直前に行われたと思われる上堂が『虚堂和尚語録』巻三「慶元府阿育王山広利禅寺語録」の末尾近くに載る「因レ事上堂」であり、つぎのように記されている。

因レ事上堂。天之有レ雲也、可下以蔽二日月一降中甘雨上。地之有レ水也、可下以済二舟楫一潤中焦枯上。人之有レ心也、可下以興二禍福一制中剛柔上。三才既明、理帰二一揆一。所二以然一者何也。卓二拄杖一。大鵬展レ翅蓋二十洲一、籬辺燕雀空啾啾。（大正蔵四七・一〇〇七b）

事に因む上堂に、「天に雲有るや、以て日月を蔽いて甘雨を降らすべし。地に水有るや、以て舟楫を済して焦枯を潤すべし。人に心有るや、以て禍福を興して剛柔を制すべし。三才既に明らかなれば、理は一揆に帰せん。然る所以んとは何ぞや」と。拄杖を卓して「大鵬、翅を展べて十洲を蓋う、籬辺の燕雀、空しく啾啾たり」と。

この「因事上堂」こそ、おそらく呉潜が智愚に対して激しい抗議をした際に、これに応じて智愚が一山の修行僧たちを前に行なった上堂であり、智愚は自らの心情を吐露している。呉潜をはじめとして謗る者たちの必要な拒抗に対し、自ら坦々として一向に変色せず、平穏無事に生きようとする智愚は、『荘子』「内篇」の「逍遥遊第一」[7]に載る故事を用いて、己のすがたを怡然自若たる大鵬の広大無辺なさまに比し、呉潜らの暴言を籬辺の燕雀の囀りに譬えている。智愚という人は妥協を許さない志操堅固な厳しさを持っており、そのことは一面できわめて尊崇されることもあるが、しばしば世に属さないということで官僚士大夫に反駁されることが存したわけである。

## 下獄事件に至る経緯

ところで、実際に『虚堂和尚語録』巻三「慶元府阿育王山広利禅寺語録」の末尾には「因事上堂」と「上堂」につづいて、

師宝祐戊午六月十四日罹レ難、七月十三日恭奉二聖旨一、与二免無レ辜、謝レ事上堂。都省羅太尉、繳上謹奏以謝。去時暁露消二袷暑一、帰日秋声満二夕陽一。恩渥重重何以報。望二無レ雲処一祝二天長一。（大正蔵四七・一〇〇七c）

師、宝祐戊午六月十四日に難に罹り、七月十三日に恭しく聖旨を奉じて、辜無きことを与免せられ、事を謝する上堂。「都省の羅太尉、繳上して謹んで奏して以て謝す。去る時、暁露は袷暑を消し、帰る日、秋声は夕陽に満つ。恩渥きこと重重たり、何を以てか報いん。雲無き処を望みて天長を祝す」と。

という上堂が最後に収められている。この「謝事上堂」によれば、智愚は宝祐六年（一二五八）六月一四日に難を蒙ってより七月一三日に聖旨を奉じて許されるまで、およそ一ヶ月という期間にわたって、難に罹って獄中に在った消息が知られる。この間、智愚は阿育王山の住持職という栄誉ある肩書きを剥奪され、牢獄の中に在って苦しい屈辱の日々を送っていたことになろう。

この点でいま一つ注目すべき記事として、物初大観が『物初賸語』巻二五の「履斎制相」と題した書簡において、

某等、備数二十禅一、有レ万二斯幸一。適当下公袞臨中鎮二藩閫一之日上、民康物阜、波及二山林之士一、俾三各安二其所一レ安。某等、方勉二焉此道一、策二諸衲子一、以酬二造化一。不レ謂、□□□□□□老謬無レ堪、只欲レ為二身後計一、而不レ知二挙動之乖戻若一レ此、自罣二厳憲一、乃自取レ之。原情定レ罪、豈某等所レ当二申控一。私竊念レ之、既有二法門之玷一、又不レ能レ無二傷類之悲一。蒲伏奔趨、跼蹐伸レ救、唯有レ哀二鳴相公一念一而已。伏惟相公、履二仏地位一、為二帝良弼一、包レ荒匿レ瑕之量、同二於江河一、擬丙望下於無二方便一処上、作乙大方便甲、全宥不レ得処、曲賜二全宥一。在二□之罪一、固不レ可レ逃、儻可レ従レ軽、或俾三小師代レ罪。庶可下全二□之餘生一、使於二閑処一懲中艾既往上。愚身非二木石一、豈不レ懐三再生之徳一、抑免レ貼二玷於法門一。又某等仰戴二金湯之大徳一、何有レ窮也。某等迫二於同寅一、出レ位僭言、無レ任二戦悚惶懼震灼之至一、伏丐鈞察。

某等、備さに十禅を数え、斯の幸に万有り。適たま公袞の藩閫を鎮するの日に臨むに当たり、民は康らかに物は阜く、波は山林の士に及んで、各おの其の安んずる所に安んぜしむ。某等、方に此の道に勉め、諸の衲子を策して、以て造化に酬いんとす。謂わず、□□□□□□老謬にして堪うる無く、只だ身後の計を為さんと欲して、挙動の乖戻の此の若くなるを知らず、自ら厳憲を罣げ、乃ち自ら之れを取る。原情にて罪を定むる、豈に某等が当に申控すべき所ならんや。私に竊かに之れを念うに、既に法門の玷有り、又た傷類の悲しみ無きこと能わず。蒲伏奔趨し、跼蹐して救いを伸ぶ、唯だ相公の一念を哀鳴する有るのみ。伏して惟みれば、相公は仏地の位を履みて、帝の良弼と為り、荒を包み瑕を匿すの量は江河に同じく、方便無き処を望んでは大方便を作さんと擬す。全く宥し得ざる処、曲げて全く宥すことを賜る。□の罪に在りては、固に逃る可からず。儻し軽きに従る可くんば、或いは小師をして罪を代わらしめん。庶わくは□の余生を全うし、閑処に於て既往を懲艾せしむ可し。愚が身は木石に非ず、豈に再生の徳を懐わざらんや。抑た玷を法門に貽すことを免れん。又た某等仰いで金湯の大徳を戴く、何ぞ窮まる有らんや。某等、同寅に迫りて位を出で僭かに言う、戦悚惶懼、震灼の至りに任うる無し、伏して丐う鈞察したまえ。

と述べていることであり、その内容こそはまさに大観が呉潜（履斎）に宛てた書簡の写しであることが知られる。この書簡には人物名に関わる重要な部分が六字にわたって欠字となっているが、石川武美記念図書館（旧お茶の水図書館）の成簣堂文庫に所蔵される宋版『物初賸語』によれば、その六字の欠字部分に「育王主僧智愚」という書入れが存している。(8) この書入れに従うならば、他の

二箇所の□にも「愚」の字が入ることになり、後段の「愚身」は愚の字を消し忘れたものということになろう。いずれにせよ、この大観が呉潜に宛てた書簡の写しとは、智愚の下獄事件に関わる内容と見られる点できわめて興味深い史料であるといってよい。大観が法友智愚の一件について呉潜に対して詫びをなし減免を求めた文面と解され、あるいはこの大観の詫状なども考慮して呉潜は怒りを静め、理宗が聖旨を下賜して一ヶ月で智愚を下獄の身から解放しているのかも知れない。

当時、大観は同じ明州鄞県内の東銭湖畔の大慈山教忠報国禅寺（大慈寺）に住持しており、明州の大慈寺はかつて宰相の史彌遠（字は同叔、魯公、一一六四―一二三三）が史氏の家刹（功徳寺）として建立した禅寺であり、『扶桑五山記』一「大宋国諸寺位次」の「甲刹」によれば、明州の甲刹に列している。[9] いずれにせよ、仮にも五山第五位の阿育王山広利禅寺の住持であった智愚が宰相呉潜の怒りを受けて下獄されたわけであるから、この下獄事件が明州内の近隣諸山の住持らに与えた衝撃はかなり強烈なものが存したはずであろう。大慈寺の大観としては智愚を下獄の身から解放すべく、呉潜との間で歎願に奔走していたものではなかろうか。

一方、『宋史』の「呉潜」の伝には、最晩年の記事としてつぎのように記されている。

> 属将下立二度宗一為中太子上。潜密奏云、臣無二彌遠之材一、忠王無二陛下之福一。帝怒、潜卒以二炎論一劾落職。命下、中書舎人洪芹繳二還詞頭一、不レ報。謫二建昌軍一、尋徙二潮州一、責授二化州団練使一、循州安置。潜預知二死日一、語レ人曰、吾将レ逝矣、夜必雷風大作。已而果然、四鼓開霽、撰二遺表一、作二詩頌一、端坐而逝。時景定三年五月也。循人聞レ之、咨嗟悲慟。

当時、呉潜は皇太子を擁立する出来事をめぐって賈似道（字は師憲、号は秋壑、一二一三―一二七五）との間で抗争を深めていた時期に当たっている。宋室では理宗に嗣子がなかったため、理宗の弟である趙与芮（嗣栄王、一二〇七―一二八七）の子であった忠王の趙禥（初名は趙孟啓、後の度宗、一二四〇―一二七四）を皇太子に推す動きがあり、これを推進せんとする賈似道らと、これに反対する呉潜らとで派閥抗争が激化していた時期に当たっている。そんな中で呉潜は理宗に内密に「臣に彌遠の材無く、忠王に陛下の福無し」と奏聞したとされる。かつて寧宗（趙擴、一一六八―一二二四、在位は一一九四―一二二四）の晩年に宰相の史彌遠は理宗を新たな皇太子として擁立し、それによって理宗は帝位に就くことができたわけであるが、そのことに比して呉潜は自らを史彌遠のような才覚がないとした上で、忠王には理宗のような福徳がないから、彼を皇太子に据えてはならないと上表したのである。これを聞いた理宗は激怒して呉潜の官位を剥奪しており、やがて呉潜は循州に送られて失意の内に景定三年（一二六二）五月に非業の死を遂げている。[10] 呉潜には『履斎遺稿』四巻や『許国公奏議』四巻が残されている。

あるいは呉潜が智愚の語録に序文を付したいと申し出た際、智愚がこれを断っている背景にも、こうした呉潜と賈似道による宋朝内の政争に巻き込まれることを嫌い、智愚としては呉潜と距離を置かんとして取った行動であったとも見られる。いずれにせよ、当時の南宋王朝は元朝（蒙古軍）の南下により激動の時代を迎えており、そうした朝廷内の政治抗争の余波を受けて阿育王山の智愚までが窮地に追い遣られていたのかも知れない。

## 一休宗純が語る智愚の下獄事件

日本の室町後期に活躍した智愚の遠孫に当たる大応派（大徳寺派）の一休宗純（狂雲子、一三九四―一四八一）は、その詩偈集である『狂雲集』において智愚の下獄事件を踏まえた三首の興味深い偈頌を残している。一休宗純といえば自ら「虚堂七世法孫」を自認し、智愚に深い共感を寄せていた禅者として知られる。以下、宗純が記した三首の偈頌について触れておきたい。[11]『狂雲集』には宗純が智愚の頂相に寄せた祖賛として、

賛二虚堂和尚一。

育王住院世皆乖、放二下法衣一如二破鞋一。臨済正伝無二一点一、一天風月満二吟懐一。（一休和尚全集一・狂雲集上・一〇頁）

虚堂和尚を賛す。

育王の住院、世は皆な乖き、法衣を放下し破鞋の如し。臨済の正伝、一点も無し、一天の風月、吟懐に満つ。

という偈頌を残している。智愚が阿育王山に住持していた際に呉潜から排斥を受けて世間の非難を浴び、法衣（袈裟）を脱ぎ捨て破れた草鞋を履いていた。そこには正法眼蔵を滅却して臨済の正宗など一点もなく、ひとり下獄の中で天空の明月を仰ぎ見る智愚の姿があった、という内容である。

同じく『狂雲集』には日本の文安四年（一四四七）秋に京都紫野の龍宝山大徳禅寺の一僧が故なく自殺したことに対する九篇の詩偈が載せられているが、その第三番目の偈頌として、つぎの一首が存している。

停レ四一月老虚堂、身上迍邅休二断腸一。苦楽寒温箇時節、黄花一朶識二重陽一。（一休和尚全集一・狂雲集上・一三八頁～一三九頁）

囚に停まること一月たり、老虚堂。身上の迍邅、断腸することを休む。苦楽と寒温と箇の時節、黄花一朶、重陽を識る。

この偈頌にも智愚が一ヶ月間にわたって牢獄に繋がれた下獄事件の事跡が引かれている。迍邅とは行き悩んで進み兼ねるさまで

あり、断腸とは腸が千切れるほど苦しみ悲しむことである。牢獄で苦しみに耐えて日々を送った智愚は、一輪の菊の花に九月九日の重陽を知った、という内容である。

いま一つ『狂雲集』には大慧派の物初大観が智愚を誹謗したことばを伝えており、

観物初謗二虚堂和尚一云、妄悪無道。因作二一偈一示レ徒。頌曰、

虚堂老独二歩丹霄一、堪レ咲属車曾載レ橋。物初面目是管見、舜犬無端妄吠レ堯。（一休和尚全集二・狂雲集下・一〇一頁）

観物初、虚堂和尚を謗りて云く、「妄悪無道」と。因りて一偈を作りて徒に示す。頌に曰く、

虚堂老、丹霄に独歩す。咲うに堪えたり、属車にて曾て橋に載ることを。物初の面目は是れ管見なり、舜犬、無端に妄りに堯を吠ゆ。

という一偈が載せられている。一休宗純によれば、大観が道交の深かった智愚を誹謗して「妄悪無道」と評したと記しており、これに対して宗純は一偈を詠じて門徒に示している。『物初和尚語録』一巻や『物初賸語』二五巻には、大観が智愚を「妄悪無道」と誹謗したような記事は見当たらず、これが如何なる史料に基づいているのかは定かでないが、おそらく智愚の下獄事件に因む伝承と見られる。推測するに呉潜の怒りを静めるために大観は智愚の出獄を願い、あえて智愚を「妄悪無道」と評して呉潜に嘆願したものではなかろうか。属車とは天子に従う侍従の車をいい、橋に載るとは山かごに乗ることをいう。智愚は独り夕焼け空の中を歩んでおり、そこにはかつての華やかな五山住持の面影もない。大観が智愚を「妄悪無道」と評したというが、それは全体を見通していない狭い見識であり、あたかも暴君として知られる夏王朝の桀王に飼われていた犬が大聖人の堯帝に対して吠えついたようなものだ、という内容である。[12]

## 越州の東山で軟禁下獄の身となる

智愚は阿育王山の住持から一転して下獄の身となったわけであるが、果たしてこのとき何れの地に留め置かれたのであろうか。この点について『虚堂和尚語録』巻一〇「法語」の「雪蓬明長老赴二禾興光孝一」によってその一端を補うことができる。松源派の雪蓬慧明はすでに智愚が杭州霊隠寺の鷲峰庵に閑居していた際に『五燈会元』を編纂刊行することをめぐって関わりが存したわけであるが、[13]後に智愚が慧明に与えた「雪蓬明長老赴二禾興光孝一」の法語に、

雪蓬明老相従有レ日。自二育王一過二東山一、客櫚之下、温然如レ春、此老之力也。（大正蔵四七・一〇六一a）

という表現が存していることから、阿育王山の住持であった智愚がしばらく東山なる地に留め置かれていた事実を知ることができる。慧明は智愚が杭州霊隠寺の鷲峰庵から阿育王山に住持した際にも随侍したものらしく、やがて智愚が下獄の身となって東山に赴くと、慧明もこれと行動を共にしたものらしい。ただし、智愚は法語の中で「客櫚の下、温然たること春の如きは、此の老の力なり」と述べているから、東山で智愚は厳しい状況にあって簷を借りて軟禁生活を送っていたものと見られ、東山閑居期を温かく穏やかに過ごせたのは慧明の献身的な支えがあったからだと述懐している。

いま一つ日本に残る智愚の墨跡として東京国立博物館所蔵の重要文化財「与二悟翁禅師一尺牘」という作が伝えられており、そこにも智愚と東山を伝える記事が見られる。これは田山方南『禅林墨蹟〈乾〉』の三七「虚堂智愚墨蹟〈尺牘〉」として載せられている。

智愚頓首再二拝両山堂上和尚悟翁郷友禅師一。

智愚難中首蒙三遠訪二東山一、飲食慰問之情、倍二於常等一。寒暑去留未二嘗不レ感。去秋聞、體力少作レ続。於二衲子辺一、得二安祥之好一。有二福徳一人、何所不二響順一耶。明知客来訪話問、欲レ往二白夏一、草率布レ此。問訊未レ間、尚祁珍二愛是請一。智愚頓首再拝。

両山堂上和尚悟翁郷友禅師。

智愚が同郷の友で両山（地名や寺名などは未詳）の住持あった悟翁という禅者に宛てた書簡である。智愚は明州象山県の陳氏の出身であるが、郷友とあるから悟翁も同じ象山県か近隣の県の出身と見られ、おそらく若い頃から知己として交友が存したものであろう。この点、悟翁について法諱や嗣承など素性が何ら定かでないのが惜しまれる。この書簡の文面によれば、智愚が難中にあった際、悟翁は遠く東山を訪れて飲食を持参して慰問しており、智愚はそのことに深く感謝の意を表している。その後、悟翁は体調を崩していたものらしく、この書簡が出される前年の秋には回復して教化に当たっている状況を知って智愚は喜んでいる。書簡自体がいつ書かれたのかは明確でないが、少なくとも智愚にとって東山閑居と難中下獄が重なっていることが窺われ、おそらく智愚は東山において下獄され、軟禁状態にあったと見てよいであろう。

では、いったい智愚が身を寄せていた東山とは具体的に何処の寺院を指しているのであろうか。東山という名は諸地に存するため、判然としないのが実情であるが、私なりに考察を試みることにしたい。『虚堂録犂耕』の中で、無著道忠はここにいう東山を蘇州（平江府）崑山県の東山を指すと推測しているが、[14] この説は首肯し難いであろう。また阿育王山広利禅寺と同じ鄞県東南四〇里には東山慧福禅寺が存しており、[15] この明州の東山のことではないかとも推測されるが、この説もなお曖昧である。私としては智愚が下獄の

身で滞在していた東山とは、明州に隣接する越州（浙江省）の東山ではないかと推測している。ただし、越州（紹興府）の内には東山と称する禅寺が二ヶ寺存しており、一ヶ寺は越州会稽県東二五里に存した東山寿寧禅寺であり、いま一ヶ寺は越州上虞県西南五四里に存した東山（謝安山）国慶禅院である。東山寿寧寺については『嘉泰会稽志』巻七「宮観寺院〈寺院〉」の「会稽県」に、

東山寿寧院、在二県東二十五里一。宣和五年、陸祠部所レ建。初蔡京為二党禁一、凡故二府臣寮名在二元祐党一者、皆奪二墳刹一、例更二其名一、為二寿寧院一。陸左丞証慈院其一也。政和中、詔皆復賜之額、亦復二其故祠部一。適以二家貲一、建二東山院一、成遂請二於州一、以二寿寧一名レ之。方建レ寺時、祠部年逾二六十一、方手植二稺松一。人或笑レ之。及二歿年九十一、松皆為二喬木一云。

と記されている。もともとその地は北宋末期に宰相の蔡京（字は元長、一〇四七―一一二六）が党人を禁固したところであり、後に東山院あるいは東山寿寧院と改められている。いま一つの東山国慶禅院については『嘉泰会稽志』巻八「寺院」の「上虞県」に、

国慶禅院、在二県西南五十里一。唐元和四年、安禅師建。咸通九年、賜二今額一。即謝太傅故宅也。

とあり、同巻九「山」の「上虞県」にも、

東山在二県西南四十五里一。晋太傅謝安所居也。一名二謝安山一。（中略）下レ山出レ微、径為二国慶寺一、乃太傅之故宅。

と記されている。この二ヶ寺のいずれかを指すものと解しておきたいが、そのいずれかの東山寺に破庵派無準下の断渓妙用がこの頃に住持していたものらしく、[16]智愚は下獄されて越州東山に軟禁生活を送っていたと見られる。

また「定水源禅師塔銘」においても、智愚が東山に軟禁されていた時期と思われる記事として、つぎのように記されている。

退二居精舎一、独侍レ側辨難、卒有二疑義一。愚公啓機以示曰、汝今太平矣。

法嗣の宝葉妙源は智愚が世に迎えられない不遇なときにも参随しつづけ、その間に大悟徹底したものらしく、智愚より「汝は今、太平なり」と印可証明のことばを受けている。おそらく妙源のほかにも不遇な智愚に随侍する門人も存したことであろう。

## 聖旨を奉じて下獄から釈放される

すでに触れたごとく『虚堂和尚語録』巻三「慶元府阿育王山広利禅寺語録」の末尾には「謝事上堂」が収められており、

師宝祐戊午六月十四日罹レ難、七月十三日恭奉二聖旨一、与二免無レ辜、謝レ事上堂。都省羅太尉、繳上謹奏以謝。去時暁露消二袢暑一、帰日秋声満二夕陽一、恩渥重重何以報、望二無レ雲処一祝二天長一。

と記されている。都省の羅太尉という官僚が智愚に非なきを上奏して許されるに至り、理宗の聖旨を奉じて漸く智愚は自由の身となったことが知られる。あるいはそこに大慧派の物初大観など智愚を取り巻く道友らによる嘆願なども功を奏したのかも知れない。このように智愚は聖旨を奉じて阿育王山に再住を許されたわけであり、そのため理宗の恩に感謝し、阿育王山に帰還することを決断したものらしい。このとき智愚が詠じた七言四句の偈頌は皇帝理宗のもとに呈されたはずであり、それがその後の両者を結びつける因縁となっている。

ところで、このとき智愚の苦境を救った都省の羅太尉については、具体的に如何なる人物であるのかは素性などが定かでない。[17] 都省とは行政を統べる尚書省のこと、太尉とは三公のひとつで丞相に次ぐ軍事の長官をいう。『虚堂和尚語録』巻七「偈頌」には羅太尉に寄せた作として、つぎの偈頌が載せられている。

寄二都省羅太尉一。

海涵山育気如レ春、内相声華中外聞。綱二紀禁底一天寵密、金璫長染二御爐薫一。（大正蔵四七・一〇三九c）

都省の羅太尉に寄す。

海のごとくに涵し山のごとくに育して気は春の如し。内相の声華、中外に聞こゆ。禁底に綱紀して天寵密なり。金璫、長く御爐の薫に染む。

羅太尉が智愚にとって大恩ある人物であったことは疑いなく、この偈頌は智愚が獄中より解放されて以降に都省の羅太尉に対して感謝の意を詠じた作であろう。大海が万流を受け入れるがごとく、山々が草木を豊かに養うように、羅大尉が陽春のように温厚な人柄であって、内相（内務大臣）としての名声が朝廷の内外に知られ、禁中に綱紀をなしていることを称えている。

一つの仮説でしかないが、この羅太尉とは同じ頃に無学祖元を慶元府東湖（東銭湖）の白雲庵に招いたことで知られる萍郷宰羅季勉ではないかとも推測される。智愚の法嗣である霊石如芝（仏鑑禅師、一二四六―？）が撰した「無学禅師行状」に「萍郷宰羅公季勉、起レ師主二白雲席一七年」（大正蔵八〇・二三八b）とあり、物初大観の法嗣である用潜覚明が撰した「無学禅師行状」でも、

既而慈渓羅知県宅有二祖庵一、在二東湖之浜一、来請主レ之。因三母老無二人奉養一、遂従二其命一。（大正蔵八〇・二三九a）

と記されており、景定三年（一二六二）に祖元が慈渓県知県の羅季勉の招きを受けて東湖の白雲庵に赴き、七年にわたり母を養って暮らしたことを伝えている。[17]

## 阿育王山広利寺に再住する

下獄の身から解放された智愚はまもなく阿育王山の住持に返り咲き、再住することになる。『虛堂和尚語録』巻三「慶元府阿育王山広利禅寺語録」は先の「謝レ事上堂」までで終わっているが、智愚がつぎに住する明州鄞県の金文山栢巖慧照禅寺への入寺が景定元年八月のことであるから、智愚の伝記におよそ満二年間の空白が存していることになろう。ところが、同じ『虛堂和尚語録』巻八には参学以文・無補・法光編「虛堂和尚続輯」（大正蔵四七・一〇四一a～一〇四四a）にも阿育王山広利寺における上堂・小参などがかなり収録されている。「慶元府阿育王山広利禅寺語録」に収められた上堂・小参などが下獄以前のものであるのに対し、「虛堂和尚続輯」に収められた「育王」自称の上堂などはそれとは別箇のものと見なければならない。ただし、再住とはいっても実際には下獄を挟んで住持職に復帰したのであるから、その間に他の禅者が阿育王山に入寺しているわけではなかろう。

「虛堂和尚続輯」の編者である以文・無補・法光の三禅者について簡略に触れておきたい。以文については『虛堂和尚語録』巻一〇「真賛」に「以文長老請」が収められており、智愚が浄慈寺に住持した頃に長老として何れかの寺院に出世開堂し、そのときに智愚の頂相を呈して智愚より自賛を得ていることになろう。無補については『虛堂和尚語録』巻七「偈頌」に「無補侍者遊方」があり、同巻四「真讃」にも「無補侍者請」が存するから、智愚に久しく侍者として仕えたものらしい。無補は一に壊衲と号し、智愚の法を嗣いだともされるが、事跡の詳細などは定かでない。法光については『仏祖正伝宗派図』や『正誤仏祖正伝宗派図』四に「仰山晦叟法光」と記されているから、智愚の法を嗣いだ門人であることが知られる。『虛堂和尚語録』巻一〇「真賛」には「光禅者請」があり、同巻七「偈頌」にも「法光蔵主之二南徐一」があり、さらに同巻九「臨安府径山興聖万寿禅寺後録」に「謝二福州光首座秉払一上堂」が存している。これらがいずれも法光のことを指すのであれば、法光は福州（福建省）の出身であり、智愚が阿育王山に住持した頃に門下に投じ、径山で智愚のもとで首座として立僧秉払し、その後に袁州（江西省）宜春県の仰山太平興国禅寺に住持していることになろう。

つぎに「虛堂和尚続輯」の箇所の上堂・小参などを列記するが、その際に智愚が自称に用いたことばが存する場合、これを付記しておきたい。「謝二樹頭一上堂（二林）」「上堂」「上堂」「仏生日上堂（育王）」「上堂（育王）」「結夏小参（育王）」「上堂」「端午上堂（虛堂）」「上堂（育王）」「上堂」「解夏上堂」「上堂」「上堂」「中秋上堂」「開爐上堂」「閏月旦謝二秉払一上堂（双林）」「除夜小参（山

僧)」「仏生日上堂(育王)」「上堂」「中秋無レ月上堂(育王)」「仏涅槃上堂(虚堂・老僧・二林)」「上堂」「上堂」「仏涅槃上堂」「謝二執事一上堂(老僧・虚堂)」「仏涅槃上堂」「円覚大師忌日拈香」「泉州崇福源長老到上堂」「上堂(育王)」「上堂(老僧・七十七)」「上堂」「上堂」「謝二瑞巌和尚一上堂」「上堂(虚堂)」「冬至小参」「上堂」「師到二乳峯一衆請上堂」となり、「仏涅槃上堂」が三度あるなど若干ながら配列に問題もあるが、実に三八回の上堂・小参・拈香が収められている。

このように「虚堂和尚続輯」において、智愚が「二林」「双林」と自称している場合は婺州(浙江省)義烏県の雲黄山宝林寺でなしたものであり、冒頭に載せられる「謝二樹頭一上堂」(大正蔵四七・一〇四一a)では「二林」と自称し、一回目の「仏涅槃上堂」では「虚堂」「老僧」とともにやはり「二林」と自称しており、「閏月旦謝二秉払一上堂」では「双林」と自称しているから、これら三上堂は宝林寺で行なわれていることになろう。「育王」と自称している場合は阿育王山でなしたものである。四番目の「仏生日上堂」(大正蔵四七・一〇四一b)で「育王」と自称して以降、「育王」の自称を用いた例が六例ほど見られるが、それらはいずれも阿育王山でなされたものである。そのほかにも重複を含めて「老僧」を用いた例が三例、「山僧」を用いた例が一例、「虚堂」と自称した例が三例それぞれ存している。このように「老僧」「山僧」「虚堂」と自称している場合は、いずれの禅刹でなされたものか明確でないが、おそらくその多くは阿育王山でなされた上堂・小参であったと推測されよう。ただし、一つ問題なのは「開爐上堂」と「除夜小参」の間に置かれている「閏月旦謝二秉払一上堂」(大正蔵四七・一〇四二a)であって、智愚が「二林」と自称としているから、配列に問題を含んでいることが知られる。

一方、この「続輯」に収められた阿育王山の上堂・小参は下獄以前のものではなく、智愚が下獄から解放されて再住して以降になした説示を編集していると推測される。また「泉州崇福源長老上堂」(大正蔵四七・一〇四三b)とは泉州(福建省)府治晋江県東北隅の崇福禅寺に住持していた法嗣の宝葉妙源が阿育王山に智愚を訪ねたときに行われたものであり、[18] その中で智愚は「以致三円悟・虎丘・応庵・密庵・松源・運庵皆戛レ玉鏗レ金、擅二此家法一」と語っており、妙源に虎丘派(松源派)の家法を伝授している。この上堂につづく「上堂」で智愚は「育王」と自称しており、そのつぎの「上堂」で智愚自身が「我今年七十七」(大正蔵四七・一〇四三b)と述べている。智愚の七七歳は景定二年(一二六一)に当たるから、明らかに阿育王山再住期の上堂であることが判明する。また「謝二瑞巌和尚一上堂」(大正蔵四七・一〇四三c)とは天童山を法弟の別山祖智に譲って明州定海県の瑞巌開善禅寺に退住していた西巌了慧が臨峰の阿育王山に智愚を訪ねたときに行われた上堂であろう。[19] 最後に収められる「師到二乳峰一衆請上堂」(大正蔵四七・一〇四

四ａ）も文中に「頼遇二堂上西江老子一是家裏人、未レ免借レ風揚レ帆」ということばが存することから、阿育王山住持期になされたものと見られる。後に智愚は慶元府奉化県の雪竇山資聖禅寺の明覚塔下に閑居するわけであり、乳峰とは雪竇山の別称にほかならない。ただし、この「師到二乳峰一衆請上堂」は智愚が阿育王山の住持として雪竇山資聖禅寺に楊岐派の西江広謀を訪ねた際に雪竇山の大衆（修行僧）に請われてなした上堂である。広謀は智愚の後席を継いで阿育王山に住持した禅者であり、あるいは智愚としては広謀につぎの阿育王山住持を託する意図で雪竇山を訪れているのかも知れない。[20]

いま一つ注目されるのは松源派（法海派祖）の無象静照（法海禅師、一二三四―一三〇六）の伝記史料である「浄智第四世法海禅師無象和尚行状記」に、つぎのような記事が見られることであろう。

景定元年庚申、掛二錫於育王山一、司二知賓職一。有二賀頌一、堅棠林作レ序、虚舟跋レ焉。（続群類九下・三六七ａ）

日本僧の静照は相模（神奈川県）鎌倉の北条氏の出身とされ、早くに入宋して松源派の石渓心月（仏海禅師、一一七七？―一二五六）に参学しており、心月が示寂して数年を経た後、景定元年（一二六〇）に至って阿育王山に掛錫している。当時の阿育王山の住持は再住期の智愚であったはずで、静照は阿育王山の智愚のもとで知客の要職を司っており、ときに知客就任を祝して同参の二六員の僧が賀頌を製し、嗣承未詳の棠林□堅という禅者が序文を作り、その後、松源派の虚舟普度（一一九九―一二八〇）も跋文を寄せており、現存する普度の跋文のみが田山方南『続禅林墨蹟〈上〉』に二九「虚舟普度墨蹟〈跋語〉」一幅として載せられている。このとき住持の智愚も賀頌を寄せた二六員の一人として偈頌を付与している可能性も存するが、残念ながらその頌軸が現今に残されていないため、その詳細は定かでない。

## 明州鄞県の金文山栢巌慧照禅寺に入寺する

その後、智愚は大刹阿育王山の住持を退き、同じ鄞県内の小刹に遷住している。『虚堂和尚語録』巻三には「慶元府阿育王山広利禅寺語録」につづいて、侍者似藻が編集した「栢巌慧照禅寺語録」（大正蔵四七・一〇〇七ｃ～一〇〇八ａ）が収録されている。侍者の似藻については事跡が定かでないが、『虚堂和尚語録』巻七「偈頌」に「示二内記藻侍者一」（大正蔵四七・一〇四〇ｂ）という偈頌が収められており、この藻侍者も似藻のことを指していよう。智愚が栢巌寺という寺院に住持したことは『増集続伝燈録』巻四の「杭州径山虚堂智愚禅師」の章にも記されており、実際に栢巌寺を加えなければ一〇ヶ寺の歴住にならないことによって窺われる。

一方、『阿育王山志』巻一六「明州阿育王山続志」の「先覚攷〈補遺〉」には「第四十四代、西江謀禅師。南昌呉氏子。嗣二淳菴浄公一」と記されており、また『扶桑五山記』一「育王住持位次」でも第四二代の住持として「西江謀禅師」の名が存しているから、智愚の後席を継いで第四四代（または第四二代）の住持として阿育王山に入寺したのは楊岐派の純庵善浄（淳庵とも）の法嗣である西江広謀であったことが知られる。[21] すでに触れたごとく智愚は阿育王山を退く直前に雪竇山の広謀のもとを訪ねて親交を深めているが、あるいはこのとき阿育王山のつぎの住持として広謀を招くべく依頼していたのかも知れない。ただし、広謀が阿育王山に住持していたのはきわめて短期に限られており、破庵派の別山祖智が景定元年（一二六〇）九月に示寂して後、天童山景徳禅寺に遷住している。しかも無準下の簡翁居敬が第四二世として景定四年（一二六三）に千仏宝閣を再建する以前には天童山を退いたか示寂していたと想定されるから、広謀が阿育王山と天童山に住持していた期間はそれぞれかなり短かったことになろう。

ところで、智愚が住持した栢巌寺の位置については『増集続伝燈録』に「四明育王・柏巌」と記されているから、阿育王山と同じ明州慶元府（四明）に存したことは判明するが、具体的に明州内の何処に存したのかがこれまで明確にされていなかったようである。一方、智愚の「行状」には「栢巌寺」の名が直接には記されておらず、「行状」に「古愚余尚書典二郷郡一、特以二金文一延レ之」（大正蔵四七・一〇六四a）とあるのがこれに合致している。では、古愚余尚書とは如何なる人物であったのか、余が俗姓であり、尚書が官職銘であり、古愚とは字の類いであろう。すでに触れたごとく『延祐四明志』巻二「職官攷上」の「宋〈知府制置姓名〉」によれば、

陳昉。集英殿修撰知慶元軍府兼沿海制置使、宝祐三年四月。
呉潜。観文殿大学士沿海制置大使判慶元軍府。宝祐四年四月。
余晦。知慶元府兼沿海制置使、開慶元年十月。復宝章閣待制。
姚希得。敷文閣待制知慶元府兼沿海制置使、景定元年四月。

と記されており、呉潜のあとに慶元府主となった余晦がこれに当たるものと見られ、余晦の字が古愚であったと推測される。郷郡とは智愚の郷里明州慶元府のことであり、余晦は開慶元年（一二五九）一〇月に慶元府主となっており、景定元年（一二六〇）三月頃までその職を勤めているから、時期的にまさに合致している。[22]『物初賸語』巻二四の「淮海禅師行状」に、

居之六年、退帰二呉門一、輦院高公容、以レ庵延レ之。適万寿席虚、発運余侍郎晦、以二公名一申レ省補処。

と記されているから、これより先に侍郎の余晦は発運使として大慧派の淮海元肇（一一八九―一二六五）を蘇州呉県の万寿報恩光孝禅

寺の住持に招いていることが知られる。

では、智愚が住持した柏巌ないし金文と称される禅寺は明州慶元府の地内のいずれに存したのであろうか。『宝慶四明志』巻一二「鄞県志」の「叙山」や『延祐四明志』巻七「山川攷」の「鄞県」には「東山・黄山・金文山・五峰山、皆在二県東南一」とあり、金文山という山が慶元府鄞県東南に存していることを伝えている。さらに『宝慶四明志』巻一三「鄞県志」の「寺院〈禅院〉」には、

金文山恵照院、県東南七十里。旧号二金文懺院一、唐乾寧二年建。皇朝治平元年、賜二今額一。常住田二百七十畝、山二千三百三十畝。

と記されており、『延祐四明志』巻一七「釈道攷中」の「鄞県寺院〈禅院〉」にも、

金文山恵照寺、県東南七十里。旧号二金文懺院一、唐乾寧二年建。宋治平元年、賜レ額。

と同様の記事が存している。また明州（寧波府）鄞県の地志である『敬止録』巻四「山川考〈山〉」の「金文山」にも、

県南七十里、旧有レ院。南有二道陣嶺一通二奉化県一、横渓河源所レ出。

とあり、同じく『敬止録』巻三〇「寺観考〈東南〉」の「金文禅寺」にも、

金文禅寺、東南七十里。唐乾寧二年建、旧号二金文懺院一。宋治平元年、賜二金文山恵照寺額一。後圮併二保福禅寺一。嘉靖二年燬、三十年重二建法堂方丈一。

と記されているから、金文山は鄞県東南七〇里ないし南七〇里に存し、南の道陣嶺から奉化県に通じ、また横渓河の水源に位置しているらしい。山中に恵照院または恵照寺という禅刹が建てられていたことが知られ、[23] この寺こそ智愚が住持した柏巌慧照禅寺を指すものであろうから、智愚が活躍していた当時、正式には金文山栢巌慧照禅寺と称していたことになろう。この寺には楊岐派の栢巌□凝や、智愚がかつて参学した大慧派の笑翁妙堪も住持し、智愚の後にも嗣法門人の無尓可宣が住持しており、一に小霊隠とも称せられていたものらしい。[24] 元代中期には大慧派の玉渓思珉（仏心明妙禅師、?―一三三七）なども住持したことが知られる。

では、智愚は金文山栢巌慧照寺にどのくらいの期間にわたって住持を勤めていたのであろうか。「栢巌慧照禅寺語録」の上堂を列記すると「師於二景定元年八月二十五日一入レ寺上堂」「開爐上堂」「謝二首座一上堂」「正旦上堂」とわずか四つの上堂を収めるにすぎない。智愚が栢巌寺に入寺したのは景定元年（一二六〇）八月二五日のことであり、すでに下獄事件から三年目に当たっている。おそらく智愚はその直前まで阿育王山に再住していたものと推測され、尚書の余晦（古愚）の推挙で五山の阿育王山から同じ県内の栢巌慧照禅寺に住持したものであろう。ただ、「開爐上堂」や「正旦上堂」が存していることから、少なくとも智愚は翌年の初春頃ま

では栢巌寺で住持を務めていたことは確実であろう。また『虚堂和尚語録』巻八「続輯」は年代的には初開堂の興聖寺から晩年に近い浄慈寺に至る間の上堂語の補遺と見てよいが、実際には阿育王山再住持期のものが多くを占めている。その中の第三一番目の結夏後一ヶ月を経た「上堂」において智愚は自ら「結夏已一月、（中略）我今年七十七」と語っており、智愚の七七歳が景定二年（一二六一）に当たることから、その年の五月一五日に栢巌寺でなされた上堂と見てよいであろう。さらにあるいは後に雪竇山に閑居するまで栢巌寺に留まっていたとするなら、なお一ヶ年ほどの住持期間となり、この寺での語録がほとんど収録されないままになっていたことが窺われる。

もっとも栢巌寺における語録には官寺的な色彩は見られず、おそらく一般的な深山中の郷刹として機能していたものと推測され、阿育王山を退いた智愚にとって栢巌寺は一種の隠山閑居のごとき住持職であったものと見てよいであろう。栢巌寺の「入寺上堂」に、

師乃云、天理好還、是処渓山舒二笑眼一、群心響応、信知此道不レ誣レ人。所以真不レ掩レ偽、曲不レ蔵レ直、自然草偃風行、太平得レ路。只如下親到二栢巌一一句上、又作麽生。卓二拄杖一。青松不レ礙二人来往一、野水無心自去留。（大正蔵四七・一〇〇七c）

と述べていることなど、智愚にとって何物にも縛られないで済む、きわめて平穏無事な時期であったことを物語っている。

静嘉堂文庫美術館に国の重要文化財として智愚の「景西至節偈」の墨蹟が所蔵されており、これは景定二年辛酉の歳に著された紙本墨書一幅である。田山方南『続禅林墨蹟〈坤〉』に二五一「虚堂智愚墨蹟〈普説偈〉」として収められている。

江北李季三省元、為レ母登レ山、設レ冥請二普説一。陞座挙、仏在二王舎城中一、舎利弗入レ城、見二月上女出レ城公案、輙成二一頌一、以資二冥福一。

相逢擺レ手上二高峰一、四顧寥々天宇空。一曲漁歌人不レ会、蘆花吹起渡頭風。

景西至節、虚堂智愚書。［智愚］［息畊叟］［虚堂］

この墨蹟は景定二年の至節（冬至の節）に江北の李季三（字は省元）という人に書き与えた偈頌であり、李季三が亡き母の冥福を祈るために智愚に普説を請うた際に智愚が書き与えた内容となっている。この墨蹟には智愚の肩書きが記されていないが、時期的には栢巌慧照寺で揮毫されたと見てよく、[27] 山とは金文山のことであろう。

いま一つ京都紫野の龍宝山大徳寺に重要文化財として、つぎのような智愚の紙本尺牘が所蔵されている。

智愚伏以、冬律向レ厳。敬惟檀越省殿元学士台几、栄二侍萱堂一、茂膺多福、龍天護持、家道殊勝、為レ尉為レ喜。比造二崇揩一、礼遇過寵、逮レ今未レ忘。忽捧二華箋一、且有二乳酪厚恵一。啓レ緘媿二悚茅畳々受賜一也。智愚得二一榻於深雲中一、苦レ無二酬応之労一、省二得朝暮訓レ徒、似レ愜二老懐一。時節艱

阻、仏法冷落、挙レ目無二正人一。不レ妨贏二得養阿一。待二尽呉賊報応天日難レ逃、毎思二門下仁孝恭倹一。敬事二諸仏一、以レ善化レ人、此是世間第一等。有二福徳一君子、須下在二富楽之郷一、澹然清散、不レ著中世間上。無事時、将二庭前栢樹子話一提撕看。忽然妙悟、便是出塵在家菩薩。尊堂令閤、祈老官人、弗二敢別布一、便旋二潦略占謝一。当二別遣レ人賀一、各也無二物答奩一。皇恐、皇恐。右謹具申呈。

十一月　日、金文山恵照禅寺住持僧智愚、劄子。

智愚、伏して以るに、冬律は厳しきに向かう。敬い惟るに檀越省殿元学士台几、萱堂に栄侍し、茂膺多福たり、龍天は護持し、家道は殊勝にして、慰め為り喜び為り。比ごろ崇堦を造り、礼遇過寵たり、今に逮んで未だ忘れず。忽ち華箋を捧げ、且つ乳酪の厚恵有り。緘を啓いて茅畳々の受賜を媿悚す。智愚、一榻を深雲中に得て、酬応の労無きを苦しみ、朝暮に徒に訓ずるを省き得て、老懐を愜たすに似たり。時節は艱阻なり、仏法は冷落し、目を挙ぐるに正人無し。妨げず、養阿を贏ち得んことを。呉賊の報応、天日逃れ難きを待ち尽くすに、毎に門下の仁孝恭倹なるを思う。敬しく諸仏に事え、善を以て人を化す、此れは是れ世間の第一等なり。福徳有る君子は、須らく富楽の郷に在りて、澹然として清散にして、世間に著われざるべし。無事の時、庭前栢樹子の話を将て提撕して看よ。忽然として妙悟せば、便ち是れ出塵の在家菩薩ならん。尊堂の令閤、祈老の官人、敢て別布せず、便ち潦略の占謝を旋らす。当に別に人を遣わして賀す、各おの也た物の答奩する無し。皇恐、皇恐。右、謹んで具申して呈す。

十一月　日、金文山恵照禅寺住持僧智愚、劄子。

これは智愚が省殿元学士という官僚に宛てた書状であるが、おそらく先の省元の李季三と同一人物であろうか。萱堂とは母親の部屋のこと、転じて母親の意であって北堂とも称され、この書状でも省殿元学士の母親が熱心な帰依者であったことが窺われるとともに、彼が母親に孝行を尽くしたことも褒め称えている。この母子より書札と恵物を受けた心遣いに対し、智愚は感謝の意を述べている。一一月とあるから時期的には先の墨蹟と同じく景定二年の一一月に記されたものと見られる。注目されるのは「呉賊の報応、天日逃れ難きを待ち尽くす」と述べている点で、呉賊の報応とは先の呉潜による下獄事件のことに触れたものであり、「時節は艱阻なり、仏法は冷落し、目を挙ぐるに正人無し」と語る中にも、時勢や仏教教団の衰微に対する智愚の憤りが窺われよう。

このように金文山栢巖慧照寺において、智愚は阿育王山時代の張り詰めた状況とは打って変わり、かなり自由な雰囲気の中で平穏に住持職を務めていたものらしい。その住持期間は景定元年八月より景定三年春頃まで足掛け三年に及んでいる。(25)

## 雪竇山資聖禅寺の明覚塔下に閑居する

その後、智愚は金文山栢巖慧照寺を退住して明州奉化県西北六〇里の雪竇山資聖禅寺の一隅に閑居している。「行状」によれば「迫二於晩景一、退二閑明覚塔下一、作二終焉計一」（大正蔵四七・一〇六四a）と記されており、智愚が晩年に至ったことを痛感して老後を養うべく明覚塔下に退閑し、そこを終焉の地と定めようとしたことを伝えている。実に啓霞山・鷲峰庵・東山と数えて四度目の隠閑であり、智愚の住山期がきわめて起伏に富むものであったことが改めて窺えよう。『物初和尚語録』「慶元府大慈名山教忠報国禅寺語録」によれば「天童西巌和尚訃音至上堂」の直後に「金文唯翁和尚至上堂」（卍続蔵一二一・八八c）がなされている[26]から、西巌了慧が景定三年（一二六二）三月二二日に天童山内の幻智塔院で示寂して間もない頃に、すでに金文山栢巌慧照寺では智愚が退住して新たに唯翁という禅者が住持しており、唯翁は臨峰の大慈山教忠報国禅寺に大慧派の物初大観を訪ねて新命住持として挨拶をなしたことが知られる。ただし、唯翁については道号のみで法諱や嗣承が未詳であり、その事跡が一切定かでないものの、智愚の後席を継いでいることからすると、智愚とも何らかの関わりが存した禅者であったと推測される。

智愚が隠閑した雪竇山の明覚塔下とは、北宋代に雲門宗中興の祖として活躍した雪竇重顕（隠之・明覚大師、九八〇―一〇五二）の祖塔が存した地のことであり、明州奉化県の雪竇山資聖禅寺の一角に存して西庵とも称されている[27]。雪竇山はいわゆる四明山の別阜に当たり、山中の錦鏡池から流れ出た流水が深い渓谷を下り、双澗となってあたかも乳水のごとく流れ落ちていることから、一名を乳峰・乳竇とも称され、また自然の景観に恵まれていることから応夢山の異名も存している。山中には禅宗十刹の第五位に列する資聖禅寺の伽藍が建ち並んでおり、唐末に南嶽下の長沙景岑の門人である雪竇常通（恒通とも、八三五―九〇五）によって開創されている。五代北宋初には法眼宗の永明延寿（智覚禅師、九〇四―九七五）などが住持しているが、とりわけ北宋代に雲門宗の雪竇重顕が入寺して大いに宗風を挙揚し、寺宇を一新してその中興と称えられたことは名高い[28]。南宋代に入って雲門宗がしだいに衰微すると、これに代わって臨済宗の黄龍派と楊岐派さらに曹洞宗の禅者が相継いで雪竇山に住持するようになっている。智愚もかつて修行参学期の最初に雪竇山に上って曹洞宗宏智派の雪竇文煥に師事して坐禅の実践に努めた経験が存している。文煥は自得慧暉（一〇九七―一一八三）の法を嗣いだ高弟の一人であり、宏智正覚の法孫に当たっている。

ところで、智愚が雪竇山に隠棲した時期であるが、『虚堂和尚語録』巻七「偈頌」に「壬戌登二雪竇一」と題する三首の偈頌（大正

蔵四七・一〇四〇b～c）が存しており、

錦鏡。　池面溶溶水照レ空、春風花影落二青銅一。倚レ欄擬レ作二機頭一看、已堕二阿師圈襠中一。

妙高。　松枯石老凍雲垂、到レ此虚空漸覚レ低。脚力尽時清興遠、与レ誰携レ手上二天梯一。

飛雪。　黒風袞袞六花軽、天列二陰崖一勢欲レ傾。到レ此只知二膚粟冷一、夜深誰聴二瀑泉声一。

と詠じている。壬戌の年とは景定三年（一二六二）を指していると見られるから、この年の三月以降に智愚は雪竇山の明覚塔下に閑居したものと推測される。智愚はここで錦鏡池・妙高峰・飛雪岩といった雪竇山の山中に存する勝躅境を詠じている。景定三年といえば智愚はすでに七八歳という高齢に達しており、若くして雪竇山の文煥に参学した頃より実に干支が一周し、六〇年もの歳月が流れ去っている。智愚にとって幽玄霊邃なる雪竇山の風景は単に終焉の地としてだけでなく、参学修道に明け暮れた若き日々を思い起こす懐かしき愛慕の地として脳裏を過ぎったことであろう。

また智愚が雪竇山の明覚塔下（西庵）に閑居していたときの消息を伝えるものとして、『虚堂和尚語録』巻一〇「後録」の「法語」に、

高麗国淑法師印二蔵経一。

如二石含レ玉、非二精鑑一焉能識二其真一。道在二己躬一、苟外求難三以適二其妙一。鑑レ之弗レ精則隠微、求レ之不レ敏則溟涬。要レ明二体道之源一、非二朝夕而可レ求レ之者也。故我竺土老師、守レ志不レ堅、棄二万乗尊栄一、受二六年饑凍一。於二臘月八夜一、忽覩二明星一、不レ離二草座一、入二不思議之境一、説二一大蔵葛藤一。籠二絡天地日月一、包二括陰陽造化一、致下於二有情無情一、総出二他影子一不上レ得。三賢十聖無レ不レ傾レ心、外道天魔悉皆拱レ手。可下以報二君親一、厚中風俗上。鎮レ浮去レ偽、潜利陰益者多矣。末後却道、始従二鹿野苑一、終至二跋提河一、於二是二中間一、未三嘗譚二一字一。可煞漏逗。従レ茲関鑰不レ厳、便見殊方異域赤県神州、海蔵金文無二処不レ有。豈止乎破二一微塵一而出二此経巻一而已哉。高麗淑法師者、竺土老師之眷属也。宿熏既深、航レ海而来、遠致二一身一、願レ満二十蔵一。綿二歴風霜一、其志愈篤、遍尋二知識一、求レ所レ不レ聞。儻能未レ展二経篋一、入二此阿字法門一、則五千餘巻総是切脚。且道、切二箇什麼字一。囫。驀然眼皮綻、不レ得レ忘二却老僧一。

宋景定癸亥秋八月、虚堂叟書二于四明雪竇西庵一。（大正蔵四七・一〇六一a）

という法語が収められている。景定四年（一二六三）秋八月の時点においても智愚は依然として雪竇山の西庵（明覚塔下）に留まっていたことが窺われ、しかもこのとき朝鮮半島の高麗国から淑法師（未詳）が到っており、淑法師は明州の地においてか大蔵経を印刷せんとして智愚に法語を求めていることが知られる。この記事は智愚と高麗僧との関わりを伝えており、淑法師の素性や活動のさ

まが明確となれば興味深い事実が判明するかも知れない。

さらに同じく智愚が雪竇山の西庵に在ったことを伝える記事として『虚堂和尚語録』巻一〇「虚堂和尚新添」に、

贈二禅客智仁一。

法戦場中樹二勝旗一、話頭何似二問頭危一。古人減レ竈添レ兵処、切忌交レ鋒蹉二過伊一。

問話行者智仁、炷レ香請レ語、以レ此贈レ之。

景定癸亥至節、虚堂老僧書二于雪竇西菴一。（大正蔵四七・一〇六二c～一〇六三a）

という禅客（行者）の智仁に贈った偈頌が載せられている。景定四年の至節すなわち冬至の節においても智愚は雪竇山の西庵に留まっていたのであり、当時、智愚はなお黙々と隠山閑居をつづけていた消息が知られる。

## 日本僧の無象静照と南浦紹明が雪竇山に智愚を訪ねる

また興味深いのは智愚が雪竇山の明覚塔下（西庵）に隠閑していた時期に松源派の無象静照と南浦紹明（円通大応国師、一二三五―一三〇八）という二人の日本僧がそのもとを訪れている事実である。「浄智第四世法海禅師無象和尚行状記」によれば「同四年癸亥、虚堂示レ師以二法語一」（続群類九上・三六七a）と記されている[29]から、かつて杭州餘杭県の径山興聖万寿禅寺で松源派の石渓心月に参じて法を嗣ぎ、その後、阿育王山で智愚にも参学していた無象静照が、景定四年（一二六三）に智愚から法語を得ていることが伝えられている。静照は阿育王山に掛錫して再住期の智愚に参学した後、雪竇山に閑居中の智愚のもとに再び随侍していたことになろう。実際に智愚が雪竇山の明覚塔で景定四年一〇月に知客の静照に付与した「法語」も伝えられている[30]。

また静照が智愚から得た偈頌の自筆も日本に残されており、東京国立博物館の保管として国宝に指定されている。田山方南『禅林墨蹟〈乾〉』の三一「虚堂智愚墨蹟〈偈頌〉」によれば、

世路多二嶮険一、無三思不二研窮一。平生見二諸老一、今日自成レ翁。認レ字眼猶綻、駐レ譚耳尚聾。信レ天行二直道一、休レ問二馬牛風一。

日本照禅者、欲レ得二数字一、径以二述懐一贈レ之。虚堂叟智愚書。［智愚］［息畊叟］［虚堂］

世路には嶮険多きも、思いて研窮せざる無し。平生、諸老に見え、今日自ら翁と成る。字を認めて眼は猶お綻び、譚に駐して耳は尚お聾す。天に信せて直道を行き、馬牛の風を問うことを休めよ。

日本の照禅者、数字を得んと欲す。径ちに述懐を以て之れに贈る。虚堂叟智愚、書す。［智愚］［息耕叟］［虚堂］

という偈頌がその本文であり、この墨蹟は世に「破れ虚堂」として知られる。[31] 人生には険路が多いが、思いがあれば窮められないことはないとし、天に信せて直道を行くことを勧めている。

一方、同じく智愚が雪竇山に閑居していた頃に、日本から南浦紹明が入宋して智愚の門を叩いている。紹明は駿河（静岡県）安部郡の人であり、久しく相模（神奈川県）鎌倉の巨福山建長興国禅寺で松源派（大覚派祖）の蘭渓道隆（大覚禅師、一二一三―一二七八）に参随していたが、日本の正元元年（南宋の開慶元年、一二五九）に二五歳で入宋し、諸方の禅刹を歴参している。「円通大応国師塔銘」によれば、紹明が初めて智愚に礼謁したのは智愚が南屏山浄慈報恩光孝禅寺に勅住して後のこととされるが、実際にはそれより以前にすでに席下に投じていたものらしい。この点、紹明自身が『円通大応国師語録』巻下「洛陽万寿禅寺語録」の入寺法語で智愚に初めて相見した時期について、

此一瓣香、日本名聞、大宋知レ貴。乳竇峰前、南屏園裡、東嗅西嗅、全無二気息一。（大正蔵八〇・一一六ｃ）

と語っていることから、智愚が雪竇山の明覚塔下に隠閑していた頃に紹明はその門下に在って研鑽に努めており、その後も杭州の南屏山浄慈報恩光孝禅寺に随侍していたことが知られる。[32]

ただし、大慧派の中巌円月（中正子・仏種慧済禅師、一三〇〇―一三七五）が建仁寺両足院に所蔵される『東海一漚別集』（『五山文学新集』第四巻に所収）の「真賛」において、つぎのような南浦紹明に対する真賛を残しているのが注目される。

南浦国師〈有レ序〉。

趙宋南渡之末、息耕老師拠二鄮嶺一、吾曾大叔父在二大慈一、二老稔相識也。禅衲往二来於二門一、我宗是時於二四明一尤盛也。円通大応国師、親二炙育王爐鞴一、帰レ郷大振二其宗一、王臣崇敬。今観二此像一、甚相感又歎。予為二物初曾孫一、甚不肖。

旱天一滴天源沢、満地焦枯得二再甦一。三尺竹篦三尺鉄、威風凛々振二皇都一。（五山新集四・五二六頁）

円月の記すところによれば、紹明が雪竇山の明覚塔下より早く阿育王山ですでに智愚に参学したとする説を伝えている。息耕老師とは智愚のことを指し、鄮嶺とは阿育王山の別称であり、大慈寺の曾大叔父とは物初大観のことである。円月は物初大観―晦機元熙―東陽徳輝―中巌円月と嗣承しているから、大観の法系上の曾孫に当たっている。円月は「南浦国師」の真賛の序において、紹明が智愚に初めて参学した場所を雪竇山の西庵ではなく、それ以前の阿育王山であったとして「育王の爐鞴に親炙し」と記して

いる。当時、阿育王山の智愚が大慈寺の物初大観とともに四明（明州）に禅風を盛んに鼓吹し、多くの修行僧が阿育王山の智愚と大慈寺の大観の間を往来しており、阿育王山の智愚のもとに紹明が入宋当初から門下として連なっていたと伝えている。

円月は大観の法曾孫に当たっているから、智愚と大観との間の道交には特別の思い入れが存したものと見られ、あるいはすでに触れた宰相呉潜による下獄事件をめぐる両者の微妙な法友関係も知っていたのかも知れない。いずれにせよ、円月の伝えるところを認めるならば、開慶元年（日本の正元元年、一二五九）に入宋求法した紹明は阿育王山再住期の智愚のもとに投じたことになり、金文山栢巖慧照寺でも引きつづき智愚に随侍し、智愚が雪竇山の明覚塔下に閑居した際もそのもとに参随していたことになろう。

## 南屏山浄慈報恩光孝禅寺に勅住する

晩景に至ったことを自覚した智愚は、自ら雪竇山の明覚塔下を終焉の地と定めて隠山退閑していたわけであるが、その徳望は彼を長く隠棲の身に甘んじさせておくことは許さなかった。やがて智愚は八〇歳の高齢をもって再び勅命によって五山の住持職に陞住していくことになる。「行状」によれば「景定甲子、有レ旨詔住二浄慈一。衲子奔集、堂単無二以容一、半居二堂外一」（大正蔵四七・一〇六四a）と記されており、景定五年（一二六四）に勅命を奉じて智愚は南屏山浄慈報恩光孝禅寺に陞住するに至ったとされる。

浄慈寺は杭州（臨安府）銭塘県の西湖の南畔にあり、南屏山を背にして建つ杭州の名刹である。五代の顕徳元年（九五四）に呉越王銭弘俶（字は文徳、忠懿王、九二九―九八八）が創建して慧日永明院と命名しており、法眼宗の永明道潛（慈化定慧禅師、？―九六一）を開山始祖に迎えている。ついで道潛と同門の永明延寿（沖玄、智覚禅師、九〇四―九七五）が第二世に招かれており、彼がこの寺で『宗鏡録』一〇〇巻を撰述したことは中国仏教史上に名高い。北宋代に入って太宗（趙匡義・趙炅、九三九―九九七、在位は九七六―九九七）が寿寧禅寺と改め、雲門宗の慧林宗本（円照禅師、法空・大本、一〇二〇―一〇九九）や法雲善本（大通禅師、一〇三五―一一〇九）さらに宝印楚明などが相継いで入寺している。南宋代に入って紹興九年（一一三九）に浄慈報恩光孝禅寺の勅額を賜っており、その後しだいに雲門宗から臨済宗楊岐派や曹洞宗の禅者へと住持が変遷していき、嘉定年間（一二〇八―一二二四）には禅宗五山の第四位に列せられたとされる。

浄慈寺の寺志としては清代に『勅建浄慈寺志』三〇巻が編纂されており、智愚のことは同巻八「住持一」の箇所に「第四十六代虚堂智愚」として若干の記事が存していが、禅宗燈史を踏襲するのみで特別な記載などは見られない。一方、『扶桑五山記』一「浄[38]

慈住持位次」によれば、

卅七、北磵簡禅師。卅八、大川済禅師。卅九、無直観禅師。四十、偃渓聞禅師。四十一、荊叟珏禅師。四十二、断橋倫禅師。四十三、虚堂愚禅師。四十四、簡翁敬禅師。四十五、淮海肇禅師。四十六、虚堂愚禅師〈再住〉。四十七、石帆衍禅師。四十八、東叟愷禅師。四十九、香山遠禅師。五十、石林鞏禅師。

となっており、智愚の名が第四三世と第四六世の箇所に二度にわたって記されており、とりわけ「第四十六世」には「再住」と付されていて、あたかも初住と再住が存したかのごとくに解される。しかしながら、智愚が浄慈寺に住持したのは一度であり、破庵派の断橋妙倫（松山子、一二〇一―一二六一）の後席を継いで浄慈寺第四四世に住持したというのは時期的に成り立たず、正しいのは大慧派の淮海元肇（原肇とも、一一八九―一二六五）の後席を継いで浄慈寺第四六世に住持したと解すべきであろう[34]。

かつて智愚は参学偏参の初めに明州雪竇山の雪竇文煥のもとから杭州浄慈寺に赴いて同じ曹洞宗宏智派の中庵重皎のもとに投じて坐禅辦道に努めた経緯があり、さらに参学偏参の終わりにも同じ浄慈寺に到って曹洞宗真歇派の長翁如浄（浄長、一一六二―一二二七）に最終的な決疑を求めて問答を交わしている。浄慈寺は智愚にとってきわめて因縁深い禅刹であったことが窺われ、その名刹に半世紀の歳月を経て自ら住持として陞住することになった智愚の感慨は想像するに余りある。「行状」によれば「景定甲子、旨有りて詔して浄慈に住す。衲子奔集し、堂単以て容るる無し、半は堂外に居す」とその活況ぶりが記されている。智愚が聖旨を受けて浄慈寺に晋山入院すると、これを伝え聞いて多くの修行僧が待ちかねていたかのごとく浄慈寺に雲集して掛搭を願ったため、僧堂内の単位に収まりきれない状況を呈し、掛搭志願僧の半数が僧堂外に居せざるを得なかったと伝えられる。智愚はきわめて厳格で枯淡な復古的宗風を振るったことから、その老熟した境涯と格調高い風貌に多くの修行僧たちが魅了され、その学人接化に浴することを求めたものであろう。ときに時世は南宋の最末期であり、南下する蒙古（元朝）の軍と対峙していた動乱の最中にあって、八〇歳に達した智愚は杭州禅林の精神的主柱として多くの道俗から慕われていたといってよい。

ところで、智愚が浄慈寺でなした上堂語録としては、『虚堂和尚語録』巻三に侍者至源・文衡編「臨安府浄慈報恩光孝禅寺語録」（大正蔵四七・一〇〇八b～一〇〇九b）が収められており、同じく巻八には参学道準・禧会・紹賢編「臨安府浄慈報恩光孝禅寺後録」（大正蔵四七・一〇四四a～一〇四八a）が収められている。この中で「臨安府浄慈報恩光孝禅寺語録」を編集した侍者の至源とは、後に触れる日本から到った巨山志源のことを指すのかも知れず、いま一人の文衡については何ら定かでない。また「臨安府浄慈報恩光

孝禅寺後録」を編集した参学門人の道準については『虚堂和尚語録』巻一〇「偈頌後録」に「準侍者帰省」（大正蔵四七・一〇五九a）として載るのがこの人に当たろう。紹賢については同じ「偈頌後録」に「賢侍者号二木翁一」（大正蔵四七・一〇五九a）と題する偈頌が存するから、木翁紹賢と称したことが知られるが、智愚の法を嗣いだ門人であったか否かは定かでない。禧会については『仏祖正伝宗派図』や『正誤仏祖正伝宗派図』四に「慈源友常禧会」として名が載るから、智愚の法を嗣いだ門人の一人で友常禧会という名であったことが知られる。

「臨安府浄慈報恩光孝禅寺語録」と「臨安府浄慈報恩光孝禅寺後録」は互いに補い合う編集になっていると見てよく、双方に載る上堂・小参などを併せることで浄慈寺住持期になした智愚の活動が全体的に補完される。はじめに『虚堂和尚語録』巻三「臨安府浄慈報恩光孝禅寺語録」に載る配列を記すならば「師景定五年正月十六日入レ寺（上堂）」「当晩小参」「結夏小参」となり、わずかに入寺直後になした三回の上堂・小参が収められているにすぎない。智愚が浄慈寺に入寺したのは景定五年正月一六日であったとされ、八〇歳という高齢に達して五山第四位の名刹に陞住したことが知られる。老齢に及んで大刹の官寺に住山することは、智愚にとって体力的にも精神的にもかなり負担で苦しいものが存したはずであろう。入寺の法語で智愚は「指二山門一」「指二仏殿一」「捧二勅黄一」「指二法座一」「陞座拈香」「歛レ衣就レ座」の順で厳かに開堂演法の儀則を行なっており、とくに「陞座拈香」では今上皇帝の理宗と皇太子の忠王（後の度宗）さらに太傅宮師枢使大丞相（賈似道か）らの文武百僚と判府安撫提領大卿らの郡県官僚と門司提挙太尉にそれぞれ拈香をなしており、最後に先師運庵普巖に対して法乳の拈香を焚いている。また提綱では浄慈寺ゆかりの北宋の太宗が一僧と交わした問答および雪竇重顕（明覚大師）の代語を取り上げた後に、

師云、明覚固是食息不レ忘。当時若問下臣僧、臥二雲深処一不レ朝レ天、因レ甚到中者裏上。但鞠躬近前奏云、請陛下高垂二天鑑一、管二取皇情大悦一。（大正蔵四七・一〇〇八c）

と述べており、理宗（初名は貴誠、名は趙昀、一二〇五―一二六四、在位は一二二四―一二六四）に対して自らを「臣僧」と称している。それまで明州雪竇山の臥雲深き明覚塔下で自由に隠閑生活を楽しんでいたのとは対照的に、帝都杭州の大刹浄慈寺で皇帝理宗や諸官僚を前に法を説くこととなった智愚の重圧が感じられよう。

すでに無準師範やその門下の西巌了慧・別山祖智・断橋妙倫あるいは大慧派の偃渓広聞らが相継いで示寂して後、年齢的にいっても八〇歳に達した智愚は南宋末期の五山叢林でまさに第一人者たるに相応しい長老格に置かれていたことは想像に難くない。ち

なみに智愚が浄慈寺に住持した当時、五山第一位の径山興聖万寿禅寺では楊岐派の荊叟如珏から大慧派の淮海元肇（原肇とも、一一八九―一二六五）に住持が代わっており、第二位の北山景徳霊隠禅寺には無準下の退耕徳寧（?―一二六九）が住持している。また第三位の天童山景徳禅寺には曹源派（または無準下）の簡翁居敬があり、第五位の阿育王山広利禅寺には智愚と関わり深い大慧派の物初大観が住持しているが、年齢的には浄慈寺の智愚がもっとも年長者であったものと見られる。

一方、『虚堂和尚語録』巻八「臨安府浄慈報恩光孝禅寺後録」（大正蔵四七・一〇四四a～一〇四八a）に載る上堂などを列記するならば「上堂」「仏涅槃上堂」「上堂」「上堂」「謝二新承天和尚一上堂」「上堂」「仏生日上堂」「結解上堂」「中夏上堂」「上堂」「上堂」「解夏小参」「次日上堂」「謝二新旧執事監収一上堂」「上堂」「中秋上堂」「謝二執事一上堂」「上堂」「上堂」「開爐上堂」「達磨大師忌拈香」「上堂」「謝レ賜レ田上堂」「上堂」「至節小参」「次日上堂」「臘八上堂」「上堂」「上堂」「上堂」「仏涅槃上堂」「上堂」「寿崇節上堂」「上堂」「上堂」「満散寿崇節上堂」「仏生日上堂」「結夏小参」「謝二秉払一夏斎上堂」「上堂」「上堂」「中夏上堂」「上堂」「上堂」「謝二監収一上堂」「上堂」「解制小参」「辞レ衆赴二径山一上堂」となり、実に四八回に及ぶ上堂・小参・拈香が収められている。

つぎに浄慈寺住持期の智愚が諸山の長老と交流した消息についてであるが、この点はわずかに「臨安府浄慈報恩光孝禅寺後録」に「謝二新承天和尚一上堂」（大正蔵四七・一〇四四b～c）として、新たに蘇州呉県西南二五里の承天能仁禅寺に住持することになった法弟の石帆惟衍が新命挨拶のために浄慈寺の智愚を訪ねてきた際の上堂が存しているほかは定かでない。惟衍についてはすでに触れたので再説はしないが、当時、蘇州の承天寺で化導を開始しており、やがて智愚の後席を継いで浄慈寺に住持することになる。智愚は「謝二新承天和尚一上堂」にて法祖松源崇嶽のことばを引用した後に、

此是老子不平之気、今対二人天衆前一、分二付石帆和尚一。於二姑蘇城畔一、大闡二芳猷一、使三天下衲僧知レ有二東山正統一。（大正蔵四七・一〇四四c）

と語っており、蘇州承天寺で法弟惟衍が五祖法演（東山）の正統として大いに仏法を挙揚することに期待を込めている。老齢に達した智愚にとって、同じ運庵普巌の法を嗣ぐ同門として惟衍が健在であることが大きな心の支えとなっていたといえよう。

また『虚堂和尚語録』巻一〇「仏事」に「径山荊叟入浄慈祖堂」と題して、

径山荊叟入二浄慈祖堂一。

餓狗縺纒古調新、年来奏入二胡笳曲一、韻出二凌霄最上層一、聴者和者倶不レ足。天風吹散落二西湖一、南宕葵蘆春水緑、夜深相対共レ誰語、無位次中陪二列祖一。（大正蔵四七・一〇六〇a）

という入祖堂の仏事法語が載せられている。これは楊岐派の荊叟如珏（仏心禅師、？―一二六四）の位牌が浄慈寺の祖堂内に納められる際に、智愚が住持として入祖堂の儀式を行なったときのものである。如珏は婺州（浙江省）の人で、圜悟克勤―此庵景元―或庵師体―癡鈍智穎―荊叟如珏と嗣承する禅者であり、浄慈寺第四一世から霊隠寺第四〇世を経て径山第三八世となっている。[35] 如珏は五山の住持を歴任しているが、おそらく径山の祖堂に位牌が納められただけでなく、もっとも所縁の禅刹であった浄慈寺の祖堂にも入祖堂がなされたものであろう。[36]

一方、智愚は浄慈寺の住持として学人接化に努めるとともに寺の経営面でも手腕を発揮している。「行状」によれば、

上二徹宸聴一、賜二絹百疋・造帳・米五伯碩・楮券十万貫一。是年秋、又賜二田参阡餘畝一。即今天錫荘是也。（大正蔵四七・一〇六四ａ）

とあって、浄慈寺に雲集した修行僧らを賄うべく、智愚は入寺してよりその年の秋にかけて朝廷の信任を得て理宗より多くの寄進を受けていることが知られる。智愚はこのとき理宗より絹一〇〇疋・造帳・米五伯碩・楮券一〇万貫を賜り、秋には田三〇〇〇余畝を賜っている。この荘田は後に天錫荘と称されているが、「臨安府浄慈報恩光孝禅寺後録」に「謝レ賜レ田上堂」（大正蔵四七・一〇四六ａ）が収められているのがこれに当たろう。この点は『虚堂和尚語録』巻一〇「後録」の「偈頌」に、

師入二浄慈一陞座。問答罷、忽天使踵レ門、伝二奉聖旨一問、趙州因レ甚八十行脚、虚堂因レ甚八十住山。師乃就挙、趙州行脚、一日到二臨済一。方濯レ足間、臨済問、如何是祖師西来意。州云、恰値二老僧洗脚一。済近前作二聴勢一。州云、会則便会、咂噉作麼。済帰二方丈一閉二却門一。州云、老僧八十行脚、今日却被二者驢子撲一。輒成二一頌一。天使楊都知繳奏、龍顔大悦、特賜二米五百碩・絹一百縑一。開堂安レ衆。続以二糧食闕典僧堂弊漏一敷奏。伏蒙二聖恩一、撥二賜水田一、歳収二租三十餘石一、並免二官税一。仍頒二降楮券一十万貫一、重蓋二僧堂一。頌云、

趙州八十方行脚、虚堂八十再住山。有三一機恢二仏祖一、九重城裏動二龍顔一。（大正蔵四七・一〇五八ｃ～一〇五九ａ）

と語られていることによって明確に知られる。智愚は唐代末期に八〇歳で行脚したとも伝承される南泉下の趙州従諗（真際大師、七七八―八九七）に準えて八〇歳で浄慈寺に勅住した自らのありようを語っている。『勅建浄慈寺志』巻七「寺産二」の「附録寺旧志載田各十一条」の中に「天錫荘」の項目が存し、浄慈寺所有の荘園（寺領）として天錫荘が杭州仁和県に存したこと、その田地・山蕩が合計で三七三三畝三分二釐四毫九糸に及んだことを伝えている。[37]

## 日本僧の南浦紹明・巨山志源・無象静照らを育成する

浄慈寺住持期には智愚の名声がよほど高かったものらしく、当時、日本より入宋した求法僧にしてその接化に浴さんと門を叩く者が存している。雪竇山閑居期から参随していた南浦紹明は、智愚が浄慈寺に勅住しても引きつづきその席下に留まって参師問法に努めている。紹明が浄慈寺の智愚との間で交わした問答商量は「円通大応国師塔銘」によれば、

虚堂愚公主二浄慈一、門庭高峻、学者望レ崖而却。師往来謁。堂曰、古帆未レ掛時如何。師云、蟾蜍眼裡五須彌。堂云、掛後如何。師云、黄河向レ北流。堂云、未在更道。師云、某甲恁麼、和尚又作麼生。堂云、黄河北流。師云、和尚莫レ謾レ人好。堂云、参堂去。（大正蔵八〇・一二七a）

というものである。智愚は浄慈寺においてきわめて高峻な禅風を挙揚したため、掛搭を願う修行僧もその多くが智愚の厳格な風貌に圧倒されて浄慈寺を後にしたとされる。そんな中で紹明は智愚に参随しつづけるのであり、智愚もまた紹明の育成に晩年の心血を注いだもののようである。智愚はかつて本師の運庵普巌と交わした「古帆未掛の因縁」をもって紹明を接得しているのであって、そこには自らの体験を通して紹明を大成させんとする智愚の意気込みが窺える。[38]

この後、紹明は浄慈寺にて賓客すなわち知客の要職を典っており、その一方で、自己の研鑽修道も怠ることなく、門庭高峻の聞こえ高い智愚の鉗鎚を引きつづき直に受けている。『虚堂和尚語録』巻一〇「真賛」によれば、その境涯はすでに智愚をして、

日本紹明知客請。

紹既明白、語不レ失レ宗、手頭鏃弄、金圈栗蓬。大唐国裡無二人会一、又却乗レ流過二海東一。（大正蔵四七・一〇六一c）

とまで言わしめるほどであり、晩年の智愚にとって日本僧紹明を門下に得たことは思い掛けない幸運であったといえよう。「円通大応国師塔銘」によれば、智愚が紹明に与えたこの真賛について、

久而令レ典二賓客一、日夕咨扣。一日使三善レ画者写二堂寿像一請レ賛。堂掇レ筆書曰、紹既明白、語不レ失レ宗、手頭鏃弄、金圈栗蓬。大唐国裡無二人会一、又却乗レ流過二海東一。時咸淳改元之夏六月也。（大正蔵八〇・一二七a）

というその間の事情が伝えられている。それは智愚が径山に遷る直前の咸淳元年（一二六五）夏六月のことであり、紹明は絵画を得意とする者に智愚の寿像（頂相）を模写させて智愚に賛語を請うたとされる。その賛語を通して、紹明が智愚の示す禅旨をよく捉えていたありよう、日本の地に自身の禅が伝えられることに対して大きな期待の眼で見守っていた老古仏智愚のありようが偲ばれる。

さらにこの頃に紹明と同じように智愚に参じてその法を嗣ぐことになる日本僧の巨山志源という禅者の存在も注目される。『延宝伝燈録』巻三「鎌倉禅興寺巨山志源禅師」の章によれば、志源は入宋して浄慈寺にて初めて智愚に相見したとされているが、実際にはそれよりかなり早くから智愚の席下に投じていたものらしい。『虚堂和尚語録』巻七「偈頌」によれば、

日本源侍者游二台雁一。

師道厳明善応酬、石橋過了問二龍湫一。一花一草人皆見、是子知レ機独点頭。（大正蔵四七・一〇四〇ｂ）

という偈頌が伝えられている。この偈頌は久しく智愚のもとで侍者を勤めていた志源が台州（浙江省）天台県の天台山中に存する石橋（石梁瀑布）や温州（浙江省）楽清県の北雁蕩山に存する大龍湫など、景勝の地へと歴遊するのを送る作であるが、志源をきわめて高く評価している。志源は紹明とともに一代の老古錐智愚の法を嗣ぐに足る逸材であったことが改めて窺える。[39]

また同じく日本僧の無象静照もこの頃に浄慈寺に到って再び智愚に参学していることが知られる。すでに述べたごとく「浄智第四世法海禅師無象和尚行状記」によれば「同四年癸亥、虚堂示レ師以二法語一」と記されていたわけであるが、それにつづいて、

同五年甲子秋、師游二洞庭一。有レ頌云、雁落二洞庭一芦岸秋、楚天雲淡画図幽、孤舟游泳波心月、七十二峯一目收。（続群類九上・三六七ｂ）

とあるから、静照は智愚が浄慈寺に開堂した後も智愚に随侍していたものらしい。景定五年の秋に静照は浄慈寺の智愚のもとを辞して遊歴し、楚天とあるから湖南の洞庭湖いわゆる瀟湘八景の地に歴遊していることが知られる。しかも洞庭湖への遊歴を終えた静照は、その後、再び智愚のもとに舞い戻っていたものらしく、同じく「浄智第四世法海禅師無象和尚行状記」には、

咸淳元年乙丑、辞二虚堂一。有レ頌云、十載従レ師幾詬拳、到頭一法不二曾伝一、有無句蕩二家私一尽、万里空皈東海船。本朝文永二年皈朝。凡在レ宋十四年。（続群類九上・三六七ｂ）

という記事が載せられている。これによれば、静照が再び智愚に参じたのはおそらく浄慈寺においてのことと見られ、日本に帰国する旨を述べて智愚のもとを去っており、その年内には南宋の地を離れて帰国の途に着いたものと推測される。[40]

このほかにも『延宝伝燈録』巻六「相州寿福寂庵上昭禅師」の章に、

南遊入レ宋、与二南浦・約翁・無象・樵谷一、同参二虚堂愚・偃溪聞・介石朋・簡翁敬諸大老一。還レ郷依二大休念于寿福一。（日仏全六九・一八〇ｃ）

とあり、黄龍派の寂庵上昭が紹明や静照のほか、大覚派の約翁徳倹（仏燈国師、一二四五―一三二〇）や無準派下の樵谷惟僊とともに智愚にも相見したとされている。上昭が智愚に参学したのが浄慈寺であったのか、径山であったのかは定かでないが、上昭が智愚

のもとに参ずる可能性は存しよう。[41]

## 『蘭渓和尚語録』を校訂して跋文を付する

浄慈寺に住持してまもなく智愚は、日本に渡来した松源派（大覚派祖）の蘭渓道隆の宋版『蘭渓和尚語録』に跋文を寄せている。[42] 日本から届けられた道隆の語録を智愚が校訂し、自ら跋文を寄せるという興味深いできごとが起こっている。すなわち、『虛堂和尚語録』巻一〇「法語」には、つぎのような道隆の『建長寺隆禅師語録』に寄せた智愚の跋文が伝えられている。

日本建長寺隆禅師語録跋。

宋有二名衲一、自号二蘭渓一。一節高出二於岷峨一、万里南二詢於呉越一。陽山領レ旨、到頭不レ識二無明一、擡レ脚千鈞、肯践二松源家法一。乗二桴于海一、大行二日本国中一、淵黙雷声、三董二半千雄席一。積二之歳月一、遂成二簡編一。忍禅久侍二雪庭一、遠訪二四明一録レ梓。言不レ及処、務要二正脈流通一。用無レ尽時、切忌望レ林止レ渇。（大正蔵四七・一〇六一b）

日本建長寺隆禅師語録の跋。

宋に名衲有りて、自ら蘭渓と号す。一節にて高く岷峨より出で、万里のかた呉越に南詢す。陽山にて旨を領じて、到頭に無明を識らず。脚を擡ぐること千鈞、肯えて松源の家法を践む。桴を海に乗せて、大いに日本国中に行き、淵黙雷声し、三たび半千の雄席を董す。之れが歳月を積み、遂に簡編を成す。忍禅、久しく雪庭に侍し、遠く四明を訪ねて梓に録む。言い及ばざる処、務めて正脈流通せんことを要す。用いて尽くす無き時、切に忌む、林を望みて渇きを止むることを。

この跋文は実際に鎌倉建長寺に所蔵される鎌倉末期の覆宋五山版『蘭渓和尚語録』巻末に、

宋有二名衲一、自号二蘭谿一。一節高出二於岷峩一、万里南二詢於呉越一。陽山領レ旨、到頭不レ識二無明一、擡レ脚千鈞、肯践二松源家法一。乗二桴于海一、大行二日本国中一、淵黙雷声、三董二半千雄席一。積二之歳月一、遂成二簡編一。忍禅久侍二雪庭一、遠訪二四明一録レ梓。言不レ及処、務要二正脈流通一。用無レ尽時、切忌望レ林止レ渇。

景定甲子春二月、虛堂智愚書二于浄慈宗鏡堂一。［智愚］［息畊叟］［虛堂］（大正蔵八〇・九三a）

として収められており、現今に流布する江戸刊本『建長開山大覚禅師語録』巻末にも同じく載せられている。智愚は道隆を宋の名僧と称えて足跡を詠い上げている。[43] 智愚の跋文によれば、末尾に「景定甲子春二月、虛堂智愚書二于浄慈宗鏡堂一」と記されている

から、この跋文が撰されたのは景定五年（一二六四）二月であったことが知られ、ときに智愚は浄慈寺住持として永明延寿（智覚禅師、九〇四―九七五）ゆかりの宗鏡堂（宗鏡台）においてこれを書している。

覆宋五山版『蘭渓和尚語録』巻下や江戸刊本『大覚禅師語録』巻下の「小仏事」と智愚の跋文の間には、

敕差住持臨安府御前香火浄慈報恩光孝禅寺嗣祖比丘智愚校勘。（大正蔵八〇・九三a）

という刊記が存しているから、智愚が浄慈寺の住持として『蘭渓和尚語録』を校勘していることは疑いない。智愚が浄慈寺に勅住したのは景定五年正月一六日であり、咸淳元年（一二六五）八月二五日には径山に遷住しているから、浄慈寺住持期間はわずか一年半あまりにすぎない。おそらく智愚は浄慈寺に入院する前から語録の校勘に着手し、入院まもない二月には序文を撰しているわけであるから、住持期間中にこれを完了し、さらにその後に版木の雕刻などがなされたものと見られる。

さらに『蘭渓和尚語録』の末尾には、智愚の跋文につづいて、つぎのような刊記が載せられている。

大宋紹興府南明孫源同剡川石巠刊。
幹当開板比丘智侃・祖伝。
北京山城州東山建寧禅寺監寺比丘禅忍、施財刊行。
天台山万年報恩光孝禅寺首座比丘惟俊、点対入板。
大宋天台山万年報恩光孝禅寺住持嗣祖比丘妙弘、点正施梓。（日仏全四八・四三a）

『大覚禅師語録』では「大宋紹興府南明孫源同剡川石岱刊」のことばが最後にまわされている。いずれにせよ、その開版に尽力した人の名が記されており、禅忍（一に祖忍）が京都東山建寧禅寺（建仁寺）で監寺を勤めていたこと、および彼が在宋中に財を施して道隆の語録を刊行していることが知られる。この刊記によって、南宋浙江の地において『蘭渓和尚語録』が校訂開板されたことが分かり、虚堂門下の東州惟俊も台州天台県の天台山万年報恩光孝禅寺の首座として住持の載流妙弘とともにこれに加わっていたことが知られる。あるいは禅忍が最初に智愚に相見したのも雪竇山の明覚塔下ではなかったかと推測され、入宋してまもなく杭州銭塘県の上天竺広大霊感観音教寺（上天竺寺）に赴いて天台宗の晦巌法照（仏光法師、一一八五―一二七三）より序文を得ている。『蘭渓和尚語録』の冒頭には、つぎのような法照の序文が収められている。

蘭渓隆老、出レ蜀南遊、至二蘇臺双塔一、遇二無明性禅師一室中挙二東山牛過窓櫺話一、遂有レ省。於レ是、知三松源提二破沙盆一得二所伝一矣。後十数年、

航海之二日本一、殆若二宿契一、迺大振二宗風一。其門人禅忍、粹二三会語録一、請二序於余一。余観二其略一曰、寒巌幽谷面面廻レ春、此土他邦頭頭合レ轍。故因而序云。

時大宋景定三年二月望日、特転二左右街都僧録一、主二管教門公事一、住二持上天竺広大霊感観音教寺一、兼住二持顕慈集慶教寺一、伝二天台教観一、特賜二紫金襴衣一、特賜二仏光法師一法照。［仏光法師］［晦嵒］［法照］（大正蔵八〇・四六a）

法照は景定三年（一二六二）二月一五日（望日）に多くの肩書きを付して自らの立場を書き残している。[44] 法照は台州黄巌県の童氏の出身で、智愚と同年の生まれであり、天台宗の北峰宗印（元実、一一四八―一二一三）に学んだ教僧であるが、大慧派の浙翁如琰（仏心禅師、一一五一―一二二五）に参禅するなど禅修行も積んでいる。道隆の門人禅忍がなぜ天台宗の法照のもとを訪れて語録の序文を請うたのかは定かでないが、法照は道隆の語録の略（一部か）を観て、異郷日本に禅風を振う道隆の姿に遠く思いを馳せている。

その後、おそらく雪竇山の明覚塔下に隠閑中であった智愚が語録の校勘をなし、越州（浙江省）紹興府において開版に向けて刊行事業が進められていたものであろう。『蘭渓和尚語録』巻下の末尾には智愚の序文に先立って「勅差住持臨安府御前香火浄慈報恩光孝禅寺嗣祖比丘智愚校勘」（大正蔵八〇・九三a）という刊記が存しており、智愚が浄慈寺の住持として道隆の語録を校勘していることが知られる。『蘭渓和尚語録』が刊行される目途が立った時点で智愚が改めて景定五年二月に跋文を寄せているわけである。

## 理宗の崩御と葬儀

景定五年（一二六四）一〇月二六日には、滅亡の危機に瀕して大きく揺れ動く大宋国にあって嘉定一七年（一二二四）ないし宝慶元年（一二二五）以来、およそ四一年もの久しきにわたって在位にあった南宋第五代皇帝の理宗が六二歳をもって崩御している。そのことは元国（蒙古）の脅威に怯える当時の南宋社会にとってきわめて重大な事件であった。ときに智愚の「行状」によれば、

十月帝崩。召レ師入レ内、対霊普説、両宮宣賚憂渥。（大正蔵四七・一〇六四a）

と記されており、智愚は朝廷に召されて入内し、理宗の霊前で対霊普説をなしたことを伝えている。この点は『虚堂和尚語録』巻一〇「仏事」に侍者恵明編として、

咸淳元年三月十一日、恭奉二聖旨一宣入二大内一普説。先於二几筵殿一遷二理宗皇帝霊舉一、入二正殿一拈香。語録、師不レ許二刊行一。

安レ孝垂レ慈契二宿熏一、鸞輿宮殿出二金門一。乾坤日月無二光彩一、草木咸霑旧日恩。恭惟烈文仁武安孝皇帝、龍鳳之姿、天日之表、堯仁舜徳、済レ

世沢レ民、垂衣端拱、四十一年、顕レ道継レ明、一十三葉。時康物阜、天清地寧。十方国土果円、一径西天路活。千花捧レ足、百宝厳レ身。空中仙楽来迎、大地六種震動。今也次第攀二違厳駕一、奉二重春行一、一句無レ私、如何話会。深炷二紫檀一楼閣現、百千諸仏共遨遊。（大正蔵四七・一〇五九c）

という一文が収録されている。ただし、この文章は智愚が刊行することを許さなかったため、普説の主要部分のみがまとめられているものであり、理宗の霊前でかなり長い普説がなされたものの抜粋であろう。しかも実際にはつぎの第六代皇帝の度宗（名は趙禥、一二四〇―一二七四、在位は一二六四―一二七四）が即位して咸淳と改元されて後、咸淳元年（一二六五）三月一一日に至って入内していることが知られ、理宗が崩御した景定五年一〇月二六日より半年近くが経過している。

智愚は即位してまもない度宗や太皇后および宋室の諸官僚らが見守る中で、きわめて装飾されたことばで理宗の崩御を悼み、その仁徳を余すところなく称えている。そこには傾き行く滅亡寸前の南宋社会にあって、智愚がその精神的な主柱ともいうべき立場で活動せざるを得なかった状況が髣髴とされる。このとき智愚に随侍して侍者として参内した恵明とは、かつて智愚の忠告を退けて『五燈会元』を編纂した雪蓬慧明であり、慧明が晩年の智愚にとって大きな助化をなしていたことが知られる。

『虚堂和尚語録』巻八「臨安府浄慈報恩光孝禅寺後録」に「寿崇節上堂」（大正蔵四七・一〇四六c）と「満散寿崇節上堂」（同前）が収められているが、寿崇節とは理宗の皇后であった謝道清（寿和聖福皇太后、一二一〇―一二八三）の生日を祝するものであり、『宋史』本紀四六「度宗本紀」に「景定五年十月丁卯、理宗崩。受二遺詔一、太子即二皇帝位一。戊辰、尊皇后謝氏、曰二皇太后一、生日為二寿崇節一」とある。

## 『永平元禅師語録』に跋文を付する

いま一つ浄慈寺住持期の智愚の消息として注目すべきは、曹洞宗真歇派（永平派）の永平道元（希玄、仏法房、一二〇〇―一二五三）の門弟である寒巌義尹（法王長老、一二一七―一三〇〇）が遠く日本から智愚のもとを来訪している事実であろう。義尹はかつて師の道元が示寂した宝祐元年（日本の建長五年、一二五三）に入宋して明州慶元府の天童山景徳禅寺に到り、翌年に帰国した経験が存したが、それより一〇年を経て景定四年（日本の弘長三年、一二六三）に再び入宋の途に着いている。[45] しかもこのとき義尹は師道元の『道元和尚広録』（単に『永平広録』とも）一〇巻を携えており、その目的は語録の校訂と序跋を南宋禅林の禅匠に求めることにあったとされる。

義尹は初めに『永平広録』一〇巻を明州定海県の瑞巌開善禅寺か台州黄巌県の瑞巌浄土禅院（小翠岩）の住持であった無外義遠（？―一二六六）に見せて校訂を求めている。義遠はいうまでもなく天童山の如浄の法を嗣いだ高弟のひとりであり、日本の道元とは同門に当たっている。義遠は破庵派の西巌了慧が明州瑞巌寺の住持を退いて天童山の幻智塔院に閑居した際にその後席を継いで瑞巌寺に住持したものらしい。義尹の要請に応じた義遠は『永平広録』一〇巻を抜粋校訂して『永平元禅師語録』（『永平略録』とも）一巻を編集し、自ら景定五年一一月一日には序文を、同年の冬至には跋文を付して義尹に与えている。[46]

ついで義尹はこれを持参して杭州に赴き、北山景徳霊隠寺に到って無準下の退耕徳寧（？―一二六九）に跋文を求めている。おそらく徳寧が実際に閲覧したのは義遠によって較正された『永平元禅師語録』のみであったものと見られ、徳寧の跋は咸淳改元後の清明（春分すぎ）の頃に書されている。[47] さらに義尹は浄慈寺の智愚を訪ねて同様に跋文を依頼しており、智愚はこれに応じて改元後の春三月に『永平元禅師語録』に跋文を寄せている。ただし、なぜか『虚堂和尚語録』にはこの跋文は収められていない。

では、義尹はどうして師道元ともっとも因縁深いはずの天童山の住持や五山第一位の径山の住持ではなく、霊隠寺の徳寧と浄慈寺の智愚に跋文を依頼したのであろうか。義遠は如浄に随侍すること久しかったと見られるから、かつて浄慈寺の如浄に相見したことのある智愚とも面識は存したはずである。義尹が徳寧と智愚を跋文の依頼者として訪ねたのには、瑞巌寺の義遠の指示によるところが大きかったのではなかろうか。無準師範の高弟である徳寧については明確な消息は定かでないものの、おそらく義遠は如浄その人を知る禅者として徳寧と智愚に白羽の矢を当て、この二人こそ同参の道元の語録に跋を寄せるに相応しい人として、義尹に指示したものと推測される。

ちなみに智愚が『永平元禅師語録』に寄せた跋文とはつぎのようなものである。

尹上人、持二日本元和尚永平集一来。観二其締構一、深遠不レ堕二語言一。自謂、得二天童浄和尚不伝之旨一。況此老平時発越、皆鏗鏘昂枿、絶二出規矩之外一。以レ此見レ之、元老則有二超師之作一。覧二斯録一者、従而魯変。

大宋咸淳改元春三月、奉レ勅住二持京国浄慈一虚堂智愚書。［息畊叟］［虚堂］（曹全・宗源下・四二a～b）

智愚はおよそ四〇年前に同じ浄慈寺にて如浄に相見し、その厳格な学人接化を直に受けているわけであるが、道元は如浄が浄慈寺から天童山に遷住して後にその門に投じていることから、奇しくも当時の智愚は道元その人を知ることはなかったものと見られる。跋文には道元の語録を目の当たりにした智愚のことばとして「深遠にして語言に堕せず」あるいは「天童浄和尚不伝の旨を得

たり」とその感慨が語られており、道元の持つ超師の作略が大いに賛嘆されている。

**註**

（1）『宋元四明六志校勘記』巻八「作者下」に『開慶四明続志』の「主修一人」として呉潜の記事が載せられており、『宋史』など諸史料を踏まえて呉潜の伝記を整理している。ちなみに『開慶四明続志』一二巻は呉潜（毅夫）が中心（主修）となって編集された四明（明州）の地志である。

（2）ただし、現存する『大慧正法眼蔵』の各刊本を閲覧しても、呉潜が撰した序文などは載せられていない。おそらく南宋末に重刊された『大慧正法眼蔵』のみに呉潜の序文が載せられ、これは日本に請来されずに終わったものであろうか。『径山志』巻一一「外護」に、

呉潜、字毅夫、宣城人。正粛公柔勝之子。宋理宗朝拝レ相。序二大慧正法眼蔵一、于二法門一得二大自在一。後為二賈似道一所レ排、謫二循州一。預知二死日一語レ人曰、吾将レ逝矣、夜必雷雨。已而果然、作レ詩端坐而逝。封二許国公一。

という記述が見られ、呉潜が大慧宗杲の『正法眼蔵』に序文を付して当時の仏教界に大きく外護貢献したことが記されている。幸い『径山志』のほかに『居士伝』巻三四「呉毅夫伝」の前半部分にも、

呉毅夫、名潜。寧国人。嘉定十年進士第一。立レ朝骨鯁、不レ避二権要一。淳祐中拝二右丞相一、以二直言一忤レ旨。責授二化州団練使一、循州安置、居常究二心大法一、深有二悟入一。序二大慧正法眼蔵一。至此事亘レ古亘レ今、漫レ天漫レ地、端視側視、直視横視、開視闔視、明視暗視、無レ不レ視亦無レ所レ視、亦無二無レ不レ視無レ所レ視。謂正即離、謂法即塵、謂眼即鑿、謂蔵即塞。是故這四箇字、直須二撇二向太洋海裏一、方免丙担枷帯索受乙人圈禁甲。然二雖如レ此、初機鈍根、也要得二一則半則胡言漢語一、覷来覷去、綻須二光景一。此時正好、拚レ命捨レ身、単鎗直進如三老鼠入二牛角一、挨レ牆拶レ壁、更無二去処一。正迷悶中、猛忽地頭破額裂、通身流レ汗、得二箇休歇一、始知二法眼慧眼天眼仏眼只是一双凡眼一。到二這裏一、説二道学人事畢一也。且未在、履斎老子即説レ偈言、若以レ色見レ我、以二音声一求レ我、是人行二邪道一、不レ能レ見二如来一。（卍続蔵一四九・四五九ｃ）

と記されており、呉潜が撰した『大慧正法眼蔵』の序文のことばが載せられている。また『明州阿育王山続志』巻一には、

呈二妙喜一。　学士履斎呉潜。

不是心兮不是仏、通身一串金鎖骨、趙州参二見老南泉一、解レ道三鎮州出二蘿蔔一。

という呉潜が明州阿育王山に存した妙喜すなわち大慧宗杲の墓前に呈したと見られる偈頌も伝えられている。

（3）『無門開和尚語録』の末尾に、無門慧開が示寂する前後の消息を記

して、つぎの一文が載せられている。

師於二庚申年三月二十八日一、辞二履斎丞相及諸府第朝士一。履斎問レ師、何日去。師答云、仏生日前去也。四月一日、師命レ工砌レ塔。至二初六日晩一問レ匠、畢レ工也未。匠答云、已畢レ工来、早請二禅師看レ塔。師於二初七日早一看レ塔回二方丈一、索レ紙写二遺書一、自撰二起龕語一云、（中略）起入塔語曰、（中略）。辞世偈云、虚空不レ生、虚空不レ滅、証二得虚空一、虚空不レ別。書レ偈畢、跏趺而逝。都知王太尉随、即敷奏恭奉二理宗皇帝聖旨一、降二賜銭三千貫一、宣葬二于護国霊洞山一。（卍続蔵一二〇・二六四b～c）

慧開は庚申すなわち景定元年（一二六〇）四月七日に遺偈を残して示寂しているが、これに先立って、三月二八日に履斎すなわち呉潜と問答を交わしていることが知られる。また慧開が示寂した後、理宗より銭三〇〇〇貫が降されて霊洞山の一隅に葬られている。

（4）『天童寺志』巻七「塔像攷」の「別山智禅師塔」に載る「別山智禅師塔銘」（正式には「慶元府太古名山天童景徳禅寺第四十代別山智禅師塔銘」）には「会宝祐丙辰、天童之景徳罹レ火、而師以二夙縁一受レ請」と記されるのみで呉潜との関わりは定かでない。『天童寺志』巻二「建置攷」によれば、

理宗宝祐四年丙辰、寺災。時観文殿大学士沿海制置大使判慶元軍府事管内勧農使金陵郡開国公呉潜、奏請下住二洞庭天王寺一別山禅師祖智上、主レ寺興復。至則結レ茅以居。

宝祐六年戊午、別山智禅師、建二復寺宇宝閣一。

と記されており、同巻三「先覚攷」の「別山智禅師」の項にも、

既公移二径山一、命レ師分座。嘉熙戊戌、洞庭天王虚レ席、迎レ師主レ之。宝祐丙辰、天童寺燬。制相呉公潜判二州事一、奏二師道行一。師被レ旨携二一鉢一囊一至、縛レ茅以居。時州久旱。師祷レ之輙応。人情奔湊、不二三載一百廃具挙、天童始復二旧観一。

とあることから、宝祐四年に回禄に罹った伽藍を復興すべく別山祖智を天童山に招いたのが呉潜であったことを伝えている。

（5）『偃渓和尚語録』巻下「偈頌」に「上二履斎呉丞相一」（卍続蔵一二一・一五一a）と題して、

合従龍首便黄扉、尽謂登庸十載遅。自是袖中霖雨手、肯令三勲業頌二皐夔一。

一新更化改レ絃初、人語驩声藹二道途一。僧自深禅湖上寺、不レ知身世在二唐虞一。

という二首の偈頌を載せている。湖上の寺とあるから、偃渓広聞が西湖に臨む杭州浄慈寺の住持を勤めていた淳祐一一年（一二五一）から宝祐二年（一二五四）の間に詠じた作であろう。

（6）『虚堂和尚語録』は大きく前録と後録に分かれて編集され、当時の禅宗語録の中ではきわめて大部のものに属するが、なぜか編集刊行される際に同時代の禅者や在俗居士（官僚）らによる序文や跋文の類いが全く収められていない。

（7）『荘子』「内篇」の「逍遥遊第一」にはつぎのようにある。

北冥有レ魚、其名為レ鯤。鯤之大、不レ知二其幾千里一也。化而為レ鳥、

其名為レ鵬。鵬之背、不レ知二其幾千里一也。怒而飛、其翼若二垂天之雲一、是鳥也。（中略）鵬之徙二於南冥一也、水擊三千里、搏二扶搖一而上者九万里、去以二六月一息者也。

（8）柳田聖山氏は「虚堂下獄の真相―中世漂泊・その八―」（『禅文化』第九六号、昭和五五年三月）において、

成簀堂の宋版には、かなり詳しい訓点と書き入れがあることで、例の六字の行の欄外に、小さく「育王主僧智愚」と書き入れがある。

と書き記している。柳田氏としては欠字部分に「智愚妄悪無道」という六文字が入るのではないかと憶測して成簀堂文庫所蔵『物初賸語』を閲覧しているが、実際には「育王主僧智愚」という六字の書き込みが存したことを伝えている。

（9）明州鄞県内の東銭湖畔の大慈山教忠報国禅寺（大慈寺）については、『宝慶四明志』巻一三「鄞県志第二」の「寺院〈禅院〉」に「教忠報国寺、大慈山。史丞相府功徳寺」と記されるのみであるが、『敬止録』巻二九「寺観考四」の「大慈禅寺」の項に、

大慈禅寺、県東五十里大慈山下。又名二教忠報国寺一。宋嘉定十三年、丞相史彌遠建、為二功徳寺一。前有二萬工池一。皇明洪武四年燬、住持宝定重建、戴九霊有レ記。今名二大慈寺一。嘉靖志云、又燬、嘉靖間重二建仏殿僧房一。

とあり、嘉定一三年（一二二〇）に史彌遠が建立して功徳寺となしたこと、さらに明代における重建などが記されている。また『淮海外集』巻上に「史衛王府大慈寺請二霊隠笑翁一開山疏」が存しており、大慈寺が大慧派の笑翁妙堪（一一七七―一二四八）を開山としていることが知られる。『扶桑五山記』一「大宋国諸寺位次」の「甲刹」には「大慈、明州〈浙江寧波府〉教忠報国禅寺。開山笑翁禅師。開基石皷。千仏閣・宝珠峯・鉢盂峰・東銭湖」とある。

（10）『仏法金湯編』巻一五「南宋」にも「呉潜」として、

潜号二履斎一、相二理宗一。因レ赴二貶所一、宿二楓亭接待寺一、謂二寺僧一曰、昔文殊告二世尊一曰、我初入二不思議三昧一、繫二心一縁一。若久習成就、更無二他想一、常与レ定俱。此繫二心一縁一、乃成レ仏作レ祖之階梯也。所謂繫二心一縁一、如二日観月観眉間毫相与レ鼻準白之類一。事雖二浅近一、理実幽微。如趙州云、老僧十二時、惟粥飯二時是襍用心。潙山問二懶安一云、汝十二時当作二何務一。安云、牧牛。潙云、作麼生牧。安曰、一回入レ草去、驀レ鼻拽将来。此皆繫二心一縁一也。是後尊宿又生二巧妙方便一、令三学人看二箇話頭一。如二狗子仏性・麻三斤・乾屎橛・青州布衫・鎮州蘿蔔・庭前柏樹子之類一、都是理路不レ通処、教三人取次看二一則一。看来看去、疑来疑去、十二時中、常不二放捨一。忽然鼻孔噴レ地一下、即是当人安身立命処。此皆繫二心一縁一之証拠也。此寺僧徒、或行厳潔、誦レ経礼レ仏、脇不レ附レ席。蓋禅教律刹之所二希有一、亦謂二精進一矣。有二此鎡基一、更能趨二上一層一、繫二心一縁一、習レ定生レ慧、則人人是仏、自家現成公案、不レ用下借二他珍宝一開張鋪席上。可レ惜、只在二有為法上一、過二了一生一。縦然以二今世持戒福徳一、来世不レ失二人身一、又重作二家計一、脱レ殼入レ殼、何時休歇。万一有二少蹉跌一、永劫扶頭不レ起、所謂、此身不下向二

今生一度上、更向二何生一度一此身。此語最為二悲切一。履斎老子、未レ能二自度一、先願レ度レ人。因書レ此、以効二法施一云。〈資監〉（卍続蔵一四八・四八六d～四八七a）

と記されており、また『居士伝』巻三四「呉毅夫伝」の後半部分にも、

及レ赴二貶所一、宿二楓亭接待寺一、告二寺僧一曰、文殊言、我初入二不思議三昧一、繫二心一縁一。若久習成就、更無二他想一、常与レ定俱。此繫二心一縁一、乃成レ仏作レ祖之階梯也。所謂繫二心一縁一、如二日観月観眉間毫相与レ鼻準白之類一。事雖二浅近一、理実幽微。如趙州云、老僧十二時、惟粥飯二時是襍用心。潙山問二懶安一曰、汝十二時当作二何務一。安云、牧牛。潙云、作麼生牧。安曰、一回入レ草去、驀レ鼻拽将来。凡此皆繫二心一縁一也。是後尊宿又生二巧妙方便一、令三学人看二个話頭一。如二狗子無仏性・麻三斤・乾屎橛・青州布衫・鎮州蘿蔔・庭前柏樹子之類一、都是理路不レ通処、教三人取次看二一則一、看来看去、疑来疑去、十二時中、常不二放捨一。忽然鼻孔噴レ地一下、即是当人安身立命処。此寺僧徒、戒行厳潔、誦レ経礼レ仏、脇不レ附レ席、蓋禅教律刹之希有、亦謂二精進一矣。有二此鎡基一、更能趯二上一層一、繫二心一縁一、習レ定生レ慧、則人人是仏、自家現成公案、不レ用下借二他珍宝一、開帳鋪席上。可レ惜、只在二有為法上一、過二了一生一。総然以二今世持戒福徳一、来世不レ失二人身一。脱レ殻入レ殻、何時休歇。一有二蹉跌一、永劫扶頭不レ起。所謂、此生不下向二今生一度上、更向二何生一度一此身。此語最為二悲切一。履斎老子、未レ能二自度一、先願レ度レ人。因書レ此、以効二法施一云。

履斎者毅夫所二自号一也、将レ卒之日、語レ人曰、吾将逝矣、夜必雷風大雨。已而果然、四更開霽、撰二遺表一作レ詩、端坐而逝。事在二景定三年一。知帰子曰、希元之論二仏法一、信有レ功二於下学一矣。雖然、学レ仏而不レ明レ宗、如下陥二蹈洿一求適中大海上、不二亦左一乎。故陳呉之説、学者其不レ可レ不レ尽レ心也。（卍続蔵一四九・四五九c～四六〇a）

と記されている。後に呉潜は賈似道によって要職を廃せられて循州（広東省）に貶謫され、正身端坐して逝去しているが、貶所に赴く際に楓亭接待寺（未詳）にて寺僧に述べたことばが収録されている。呉潜が仏教とくに禅門に深く精通していたこと、古則公案も参究していた様子や最期を迎えるまで仏教の「自未レ得レ度先度レ他」の思いを持ち続けていたありようが窺われる。とりわけ呉潜は死に臨んで「遺表」を撰し、遺偈の詩を作り、正身端坐して逝去しており、あたかも禅者のごとき最期であったと伝えられている。

（11）柳田聖山氏は『一休〈日本の禅語録十二〉』（講談社、昭和五三年一〇月）において、この三首をつぎのように現代語訳されている。

虚堂和尚をたたえる

育王さびしや、人よりつかぬ、袈裟ぬぎすてて、ヘイリのごとし。
臨済の未練、きれいにきえて、空に明月、胸のうた。（二三四頁）
虚堂も、ひと月、監獄ずまい、とらわれの身を、うらむでないぞ。
河東の苦楽は、今のこと、黄菊ひそかに、もう重陽だ。（九〇頁）

物初大観が虚堂和尚をにくんで、妄悪無道と評した。そこで

一首の偈をつくって、学生に見せた。その頌、

虚堂じいさん、夕やけ見ている、天子の山かご、何たることか。物初のふしあな、何をみた、桀のかいいぬ、堯帝ほえた。（二四一頁）

（12）「舜犬無端妄レ吠堯」と記されているが、舜犬は桀犬の誤りである。「桀の犬、堯を吠ゆ」とは、人はその主人に忠義を尽くそうとして、相手の善悪を区別せずに攻撃することに譬えられる。『景徳伝燈録』巻一三「汝州風穴延昭禅師」の章に「問、如何是臨済下事。師曰、桀犬吠レ堯」（大正蔵五一・三〇三c）とある。

（13）雪蓬慧明と智愚との関わりについてはすでに触れたが、詳しくは拙稿「『五灯会元』編集の一疑点」（『印度学仏教学研究』第二九巻第二号）および「雪蓬慧明の活動とその功績―『五燈会元』編纂刊行の陰に隠れて―」（『駒澤大学仏教学部研究紀要』第六八号、平成二二年三月）を参照されたい。

（14）無著道忠は『虚堂録犂耕』にて「自育王過東山」に註を付して、

忠曰、此東山在二南京蘇州一者也。何以知レ之。前六偈頌〈卅丈右〉心侍者帰省頌曰、海山印渚知二吾処一、終不二深雲一独掩レ扃。余覧二呉興記一、知二印渚呉興地名一。而呉興南京蘇州也。按二南京名勝志九一、蘇州崑山県曰二東山一、在二県城東一。宋范良遂読二書于此一、名曰二墨荘一。著有二墨荘漫録一。（禅文化本・一一六五a～b）

と記しており、智愚が閑居していた東山を蘇州崑山県の東山と推測しているが、ここではその説は採用しない。

（15）『延祐四明志』巻一七「釈道攷中」の「鄞県寺院〈禅院〉」に、

東山慧福寺、県東南四十里。旧号二福昌院一。宋淳祐七年、鄭丞相請二於朝一、増レ田重建、為二功徳寺一、改賜二今額一。

とあり、『敬止録』巻三〇「寺観考〈東南〉」にも、

東山禅寺、東南四十里。旧号二東山安国院一、唐大順二年建。宋政和元年、賜二東山福昌額一。淳祐七年、丞相鄭清之増レ田重建、為二功徳寺一、請賜二東山慧福額一。今為二東山禅寺一。有二鄭相祠堂一。宝慶志、常住田四百三十五畝、山一千百二十畝。永楽間、僧併二金峩禅寺一。

と詳しく記されており、明州鄞県東南四〇里の東山慧福寺の歴史的変遷が知られる。この寺には南宋中期に楊岐派の全庵斉己（？―一一八六）が住持している。

（16）越州の東山と無準下の断渓妙用に関わる墨蹟として、鎌倉市の常盤山文庫には重要文化財「与白雲慧暁雅号偈」が所蔵されており、『禅林墨蹟〈乾〉』に四九「断渓妙用墨蹟〈白雲偈〉」として、

白雲悠々無二定度一、舒巻縦横常澹泞、舒兮密々包二乾坤一、巻兮綿々渾不レ露。如今舒巻皆自由、大唐鎖断山無数、一声平地轟二怒雷一、天風吹還二日本一去。溶々曳々撥難レ開、散作二甘霖一潤二焦苦一。

右為二日本暁禅翁一、題二白雲雅号一。

咸淳己巳、住二越東山一断谿老樵妙用拝手。

［越関妙用］［東山老樵］

と記されている。これによれば、断渓妙用が咸淳五年（一二六九）

頃に越州の東山に住持していることが知られ、日本に帰国する聖一派の白雲慧暁（仏照禅師、一二二三―一二九七）に白雲の道号頌を付与している。『続禅林墨蹟』にも二七二「断渓妙用墨蹟〈送別偈〉」として断渓妙用が揮毫した「送行頌」の作が残されている。『仏祖正伝宗派図』によれば「径山無準師範」の法嗣のひとりに「東山断渓妙用」の名が存している。また『元亨釈書』巻八「釈順空」の章にも、

又振レ錫訪二用断渓於越之東山、寧退耕於明之万寿一。慧西巖住二太白峯一、道価高二東浙一、空遷而附。

と記されており、同じ聖一派の蔵山順空（無量房、円鑑禅師、一二三三―一三〇八）も在宋中に越州東山にて断渓妙用に参学している。越州東山には元代後期にも大慧派の元叟行端（寂照、慧文正辯仏日普照禅師、一二五五―一三四一）の法嗣である復原福報（海印）などが住持している。また明代初期に『仏法金湯編』一六巻を編集した大慧派の岱宗心泰（仏幻、一三二七―一四一五）の場合は、明確に越州上虞県の東山国慶寺に住持している。

(17)『虛堂録犂耕』では無著道忠は「羅太尉」について「羅氏失レ名、時三公也」（禅文化本上冊・三七五頁下段）と註し、また「寄二都省羅大尉一」にも註を付して「忠曰、都省尚書省也。羅太尉救二師難一者」（禅文化本下冊・九〇〇頁上段）と記すのみである。

(18) 佐藤秀孝「宝葉妙源と『虛堂和尚語録』―南宋末元初の江南禅林に菩薩道を貫いた祖師―」（『駒澤大学仏教学部論集』第三七号、平成一八年一〇月）の「虛堂智愚の下獄事件から妙源の悟道へ」の項では、阿育王山再住の記事が存せず、錯綜が見られることから、本内容に訂正しておきたい。

(19) 西巖了慧には『西巖和尚語録』二巻が存し、上巻には「慶元府太白名山天童景徳禅寺語録」につづいて「瑞巖山開善禅寺語録」が収められているが、瑞巖寺入寺の年月などは記されていない。また「西巖禅師行状」においても別山祖智に天童山を任せた後の記事として、

師退掃二中峰一榻一者三年。松壑趙大卿臨訪曰、瑞巖先公清敏王神遊地、名徳不二以下レ喬臨レ蒞之可一乎。辞レ之、力二其請益一。力居僅二年、疾洊作。師曰、吾世縁尽矣。退養二痾于太白清風塢幻智塔庵一。（卍続蔵一二二・一八六a）

とあるから、了慧は天童山内の中峰に閑居すること三年を経て明州定海県の瑞巖開善禅寺に住持し、二年を経て再び天童山の幻智塔庵に隠棲していることが知られる。

(20) 西江広謀は楊岐派の淳庵善浄（純庵）の法嗣であり、『物初賸語』巻二〇の疏に「雪竇請西江諸山疏」が載せられているから、これは広謀が雪竇山に住持する際に物初大観が記した諸山疏である。

(21) 阿育王山の住持は虛堂智愚・西江広謀・淮海元肇・物初大観とつづいている。『物初賸語』巻二四「淮海禅師行状」には、

万寿丁歉不レ振、僉謂二非レ公不レ可。府帥雲巖供侍郎蕭、命レ公再住。而四明育王虛レ席、今廟堂特奏レ公補処。居レ之三年、遷二浄慈一。

とあり、おそらく広謀が示寂して虛席となった阿育王山に元肇が住持しており、三年後に杭州浄慈寺に遷住しているから、このとき大

観が阿育王山に陞住したものであろう。『無文印』巻一九「書劄」に「西江和尚」が収められており、無文道璨が広謀に宛てた書簡の写しである。同じく『無文印』巻二「詩」にも「昼坐二円常江天軒一聴レ読二謀西江示衆語一」が存している。『物初賸語』巻二一の祭文には「西江〈二〉」が存しているが、これは広謀が示寂した際に大観が記した祭文であり、そこには「五山」の語も見られる。また『淮海外集』巻下「祭文」にも「祭二西江禅師一文」が残されており、元肇も阿育王山住持として示寂した広謀のために祭文を認めている。

(22) 余晦は慶元府昌国県の人で、余天錫（字は淳父、号は畏斎）の従子に当たり、景定年間（一二六〇―一二六四）の初めに知慶元府（慶元府主）に除せられ、知臨安府も兼ねている。『宋史』巻四一九「列伝第一七八」の「余天錫」の項に「従子晦」として簡略な伝が存する。

(23) 『敬止録』巻四「山川考一」には「金文山、県南七十里。旧有レ院。南有二道陣嶺一、通二奉化県一、横渓源所レ出」と記され、同巻三〇「寺観考五」にも「金文禅寺、東南七十里。唐乾寧二年建、旧号二金文懺院一。宋治平元年、賜二金文山恵照寺額一。後圮。僧併二保福禅寺一。嘉靖志、嘉靖二年燬、三十年、重二建法堂方丈一」と記されている。

(24) 大慧派の枯崖円悟が編纂した『枯崖和尚漫録』巻中には、

慶元府小霊隠栢巌凝禅師、性簡亢無レ所二交接一。乃息庵法嗣、住二金文一日、提綱云。

とあるから、楊岐派の息庵達観（一一三八―一二一二）の法を嗣いだ栢巌□凝が金文山栢巌寺に住持していることが知られ、栢巌寺が一に小霊隠とも称されていた事実が窺われる。

(25) 『禅林墨蹟拾遺〈中国篇〉』に五九「虚堂智愚墨蹟〈偈語〉」として、

古朴江湖姓字鄉、幾茎華髮鬢辺生。要レ知二事□無レ能処一、玄路多従二鳥道一行。

龍嶼宰山賢禅徳、徽号拙翁請。

虚堂智愚、説二半偈一、表而書レ之。

景定壬戌春三月、書二于柏岩獅子峰下一。

［智愚］［息耕叟］［虚堂］

とあり、これは三井本家所蔵とされる。拙翁□賢については如何なる嗣承の禅者か不詳であるが、景定三年（一二六二）三月の作であり、智愚自身も「柏岩の獅子峰下に書す」と書き記しているから、当時、智愚はなお栢巌慧照寺に止住していたことが知られる。

(26) 『物初和尚語録』「慶元府大慈名山教忠報国禅寺語録」には「天童西巌和尚訃音至上堂」「上堂」につづいて、

金文唯翁和尚至上堂。栢巌那畔、布二偃月之陳一、双照明辺、流二蠱家之毒一。褫二剥郎一罷、殃二害衲僧一。今日兵車会同、慈雲請避二三舎一。何故。兄弟添二十字一。（卍続蔵一二一・八八c）

という上堂を収めている。金文と栢巌が同一の地を指すことは窺われるが、唯翁和尚の嗣承に関するような記載は見られない。

(27) 『嘉泰普燈録』巻一四「平江府西山明因曇玩禅師」の章に「紹興二十三年、謝レ事居二四明雪竇明覚塔所一。皇叔欲二奏回二象軾一、竟以レ疾辞レ之。明年帰寂」（卍続蔵一三七・一一一d）とあり、同じ『嘉泰

普燈録』巻一三「臨安府浄慈自得慧暉禅師」の章にも「七年秋、退帰二雪竇一、晦二蔵明覚塔一。十年仲冬二十九日中夜、沐浴書レ偈而逝。窆二全身於中峰一、号二双塔一」（卍続蔵一三七・一〇二a）とあるから、臨済宗楊岐派の明因曇玩（？―一一五四）や曹洞宗宏智派の自得慧暉（一〇九七―一一八三）などが明覚塔所を終焉の地と定めて閑居していることが知られる。

(28)『雪竇明覚禅師語録』巻末と『雪竇寺誌』巻六上に「明州雪竇山資聖寺第六祖明覚禅師塔銘」が存し、『乾道四明図経』巻一一に「雪竇山資聖寺明覚大師碑」が収められている。

(29)「浄智第四世法海禅師無象和尚行状記」には「同四年癸亥、虛堂示レ師以二法語一」の記事の直前に「同三年壬戌九月五、登二石橋一作二尊者薬供一、盞々異花乱墜、五百声聞幻出相見。因レ之有レ頌、諸大尊宿其和若干首」（続群類九上・三六七a）という記事が存する。静照が景定四年（一二六三）九月五日に台州（浙江省）天台山の石橋（石梁瀑布）に上って五百羅漢に献茶した因縁であり、このとき静照が詠じた偈頌に南宋禅林の諸尊宿が和韻した偈頌集が存したとされる。あるいはその中に智愚の作も収められていたかも知れない。

(30) 法語は後半を逸しているが、田山方南『続禅林墨蹟〈上〉』に二四・二五「（重文）虛堂智愚墨蹟〈法語〉」として収められており、景定四年（一二六三）開爐（一〇月一日）の後三日を経て明覚塔下で書されている。絹本で縦三二・一センチ、横六〇・九センチの墨蹟であり、江戸初期に大応派（大徳寺派）の沢庵宗彭（東海和尚・普光国師、一五七三―一六四五）が補紙して跋語を付している。

(31) この偈頌は縦二八・五センチ、横七一・五センチであり、かつて京都の豪商大文字屋に所蔵されていた折に破られ、補修の痕跡があることから、世に「破れ虛堂」と称されている。

(32) この点については佐藤秀孝「虛堂智愚と南浦紹明―日本僧紹明の在宋中の動静について―」（花園大学『禅文化研究所紀要〈加藤正俊先生喜寿記念論集〉』第二八号、二〇〇六年二月）に詳しい。

(33)『勅建浄慈寺志』巻八「住持一」に「虛堂智愚」として項が存し、

虛堂智愚、四明人。出二世嘉禾興聖・光孝、遷明之顕孝・延福・瑞巖・婺之宝林・四明育王・柏巖・杭之浄慈・径山一、凡歴二十一刹一。（中略）師在二浄慈一入院日問答絶、忽天使踵レ門伝レ旨問、趙州因レ甚八十行脚、虛堂因レ甚八十住山。師挙下趙州行脚到二臨済一話上頌曰、趙州八十方行脚、虛堂八十再住山、別有二一機一恢二仏祖一、九重城裏動二龍顔一。使以レ頌回奏。上大悦、特賜二米五百石・絹一百縑一。開堂安レ衆。其住二育王・径山一、亦賜賚優渥云。嗣二運菴巖一。第四十六代。

と記されているが、内容的には『増集続伝燈録』などの記事の範疇を出ていない。ただし、智愚の住持地一〇ヶ寺を挙げながら、なぜか「凡そ十一刹を歴たり」とまとめている。

(34)『勅建浄慈寺志』巻八「住持一」には智愚の前後の住持について、

第三十九代無極観・第四十代偃溪広聞・第四十一代荊叟如珏・第四十二代断橋妙倫・第四十三代介石明・第四十四代簡翁敬・第四

十五代淮海原肇・第四十六代虚堂智愚・第四十七代石帆衍・第四十八代東叟仲穎・第四十九代香山遠・第五十代石林行鞏。

と配列されており、『扶桑五山記』一「浄慈住持位次」で「四十三虚堂愚禅師」とされている箇所が「第四十三代介石明」となっており、大慧派の介石智朋（智明は誤り）を充てている。『物初賸語』巻二四「淮海禅師行状」によれば、

而四明育王虚レ席、今廟堂持奏レ公補処。居レ之三年、遷二浄慈一。未二一年一、遷二霊隠一兼二浄慈一。不レ閲レ月遷二径山一。公自謂、不二半年一、三受二勅命一、亟草奏固辞、旨不レ允。

と記されている。淮海元肇は楊岐派の西江広謀の後席を継いで阿育王山に三年間にわたって住持しており、智愚が雪竇山の明覚塔下に閑居している間に浄慈寺へと遷住している。しかも元肇が浄慈寺に住持していたのは一年にも満たず、まもなく霊隠寺に遷住して暫くは浄慈寺の住持も兼ねていたものらしい。その後、元肇は楊岐派の荊叟如珏の後席を継いで径山に遷住しているわけであるが、このとき虚席となった浄慈寺に智愚が代わって招かれることになったものであろう。

(35) 楊岐派の荊叟如珏は婺州（浙江省）の出身で、癡鈍智穎の法を嗣いでおり、湖州（浙江省）烏程県の道場山護聖万寿寺から明州の阿育王山広利寺に遷住し、杭州の浄慈寺と霊隠寺を経て径山に住持している。『蔵叟摘藁』巻下には大慧派の蔵叟善珍（一一九四―一二七七）が撰述した「浄慈薙髪捨銭記」が存し、如珏が浄慈寺でなした活動を記している。『兀菴和尚語録』巻中「住巨福山建長興国禅寺語録」に「径山偃渓・珏荊叟・国清源霊叟等訃音至上堂」（卍続蔵一二三・一三c）が収められ、『元亨釈書』巻八「釈順空」の章にも、

平副帥勧レ空游二宋国一。時聞偃渓拠二径山一、接二単位於海衆一。明年渓寂。珏荊叟自二霊隠一来、居二主席一、踰レ年而化。肇淮海来、又如二珏叟之去就一。空歴二三老一、参請不レ倦。（日仏全六二・一一一a）

と記されていることから、如珏は大慧派の偃渓広聞（仏智禅師、一一八九―一二六三）の後席を継いで霊隠寺より径山に住持したが、景定五年（一二六四）に示寂したものらしい。また『禅林諸祖弔霊語藪』には如珏の葬儀に関する記事がいくつか収録されており、巻六「入龕」に破庵派無準下の希叟紹曇が「為二荊叟和尚一」としてなした入龕法語を収め、巻七「鎖龕」に松源派の渓西広沢がなした鎖龕法語を、「掛真」に日本から入宋した松源派（大覚派）の約翁徳倹（仏燈国師、一二四四―一三二〇）がなした掛真法語を、「挙哀」に禅首座（未詳）がなした挙哀法語を、「奠茶」に破庵派無準下の中洲□謐がなした奠茶法語および「奠湯」に月蔵主（未詳）がなした奠湯法語をそれぞれ収め、巻八「起龕」には心首座（未詳）がなした起龕法語を載せている。また巻一〇「入祖堂」には「為二径山荊叟和尚一〈就二浄慈一〉」と題して虚堂智愚の入祖堂の法語も載せられている。

(36) 『勅建浄慈寺志』巻一「興建一」の「祖堂」に、

浄慈寺旧志、祖師殿三楹、在二毘盧閣右一。内供二達摩及清涼益・天台韶・定慧潜・智覚寿五祖像一。万暦丙午、円嶽重修。

と記されているから、浄慈寺の祖堂は毘盧閣の右にあり、堂内には達磨像のほかに清凉文益（大法眼禅師、八八五―九五八）・天台德韶（韶国師、八九一―九七二）・永明道潛（定慧禅師、?―九六一）・永明延寿（智覚禅師、九〇四―九七五）という法眼宗の四祖師像が安置されていたとされる。

(37)『勅建浄慈寺志』巻七「寺産二」の「附録寺旧志載二田各十一条一」に「天錫荘」の項が存しており、

一、天錫荘、田地・山蕩共計三千七百三十三畝三分二釐四毫九絲。坐二落仁和県十七八等都図一。景定五年、欽賜二住持至愚一、永充二祝延香火一、膳給二僧徒之産一。自レ歴二宋元一、寺衆頼以レ焚修。至二嘉靖末一、僧疏賦重撒レ佃与レ民、歳収餘租以抵二修膳一、而産猶存二於寺戸一。（中略）萬歴十二年十月十一日、住持円崑、告二蒙本府同知喩准差張美拘各里長許清等一、審議毎レ畝仍納二餘租銀二錢一分一、修二葺寺宇一、接二待客僧公用一。其時輿情悦服。当年即収二租銀三百餘両一。其田地山蕩、原派餘租、分為二上中下三科一。（後略）

と記されている。景定五年（一二六四）に住持智愚に対して最晩年の理宗が杭州仁和県十七八等都図の田地・山蕩三七三二畝余りを下賜したことが知られる。ただし、ときの住持の名を「至愚」と記しているのは明らかに智愚の誤りである。『勅建浄慈寺志』巻一「興建一」には至正二年（一三四二）に虞集（字は伯生、号は道園、邵庵先生、一二七二―一三四八）が撰した「重修浄慈報恩光孝禅寺記」が載せられているが、その中に智愚に関して、

景定五年、虛堂至愚主レ之、賜以二礼部度僧空牒若干一、以二鬻金一備用、又賜レ田曰二天錫荘一。不二十余年一而宋亡矣。

と伝えており、『勅建浄慈寺志』巻二七「雑記一」においても、

景定五年、虛堂至愚入院日、忽天使踵レ門伝レ旨問、趙州因レ甚八十行脚、虛堂因レ甚八十住山。師挙三趙州行脚到二臨済一、頌曰、趙州八十方行脚、虛堂八十再住山、別有二一機一恢二仏祖一、九重城裏動二龍顔一。使以レ頌回奏、上大悦特賜二米五百石・絹一百縑・礼部度僧空牒若干一、以二鬻金一備用。又有レ旨増賜二田若干一、曰二天錫荘一。

〈続燈録〉

と記されている。いずれも智愚を至愚と記しているものの、景定五年に浄慈寺に入院し、理宗より天錫荘の田を賜ったと伝えている。

(38) 龍谷大学図書館所蔵『大徳寺夜話』の第二八番目の逸話に、

大応国師、初見二虛堂和尚浄慈一之次、虛堂問云、古帆未レ掛時如何。大応云、蟾螟眼裏五須弥。堂云、掛後如何。応云、黄河向レ北流。堂云、未在更道。応云、某甲恁麼、和尚作麼生。堂云、黄河向レ北流。応云、和尚莫レ瞞レ人好。堂云、参堂去。此問答之時之肖像ノ賛ニ、此問答ヲ全篇書タヲ、言外和尚御覧シテ、賛ヲ剪テノケラレタ。師曰、ナニトシタ事ニ、御沙汰アリタソ。辨レ之弁ニ、未在更道ト云処ニテ、和尚莫レ瞞好ト云タラハ、ヨカラウ事チヤヲ、奥テ言ハ、マチト手展ナ也。師肯レ之。

と記されている。飯塚大展「龍谷大学図書館蔵『大徳寺夜話』をめぐって（一）―資料編―」（『駒澤大学禅研究所年報』第一〇号、一九九

九年三月）を参照。

（39）『延宝伝燈録』巻三「相州禅興二世巨山志源禅師」の章によれば、

相州禅興二世巨山志源禅師。歴二参華夷一、綜二覈内外一。又入二宋地一、参二侍虚堂和尚于浄慈双径間一。因縁契レ機、遂受二記莂一。辞覧二霊区一、及三其遊二台鴈一、堂付レ偈曰、師道厳明善応酬、石橋過了問二龍湫一、一華一艸人皆見、是子知レ機独点頭。（日仏全六九・一六六ａ）

と記されており、巨山志源が入宋して浄慈寺と径山で智愚に参随して印可を受けたとする。

（40）『無象和尚語録』巻下「普説」の「瓊林為二虚舟和尚一請普説」に、

古者徧二参知識一、得二一言之益一、如二貧得レ宝、如三子得レ母。一旦被二人推出一、承嗣焼香、只為三発明之師一、蓋知レ恩不レ本也。山野昔在二大唐一、毎聞二虚堂和尚説一云、希レ勢忘レ本、辜レ恩負レ義者。（五山新集六・五七三頁）

とあり、静照が智愚のもとで研鑽していたときを振り返っている。

（41）ただし、大覚派の約翁徳倹の場合はいくぶん後輩であり、「大日本国特賜仏燈国師約翁和尚無相之塔銘並序」にも、

乃更遊レ宋、初達二台之九山一、首見二寂窓照於育王一。一時宗匠、天童石帆衍・浄慈東叟穎・霊隠虚舟度・径山蔵叟珍・簡翁敬・覚庵真、咸推器重。于レ時名勝、熙晦機・万一山・本末宗・相寂庵、皆楽二与レ之遊一。（続群類九上・三九一ｂ）

と記されている。徳倹が入宋して参学した禅者らが智愚の示寂して後に大刹に住持した人々であることから、徳倹自身は智愚に相見することはなかったものと推測される。また樵谷惟僊については、『延宝伝燈録』巻三「信州崇福山安楽寺樵谷惟僊禅師」の章に「航レ海南遊、於二別山智和尚輪下一罷二参詢一」（日仏全六九・一六四ａ）と記されているが、智愚に参学したことは記されていない。別山祖智は景定元年（一二六〇）九月一一日に示寂しているから、惟僊がそれ以降に智愚に参学した可能性は存しよう。

（42）鎌倉建長寺に所蔵されている『蘭渓和尚語録』二巻はかつて宋版と見られていたが、現今では鎌倉後期に日本で再刊された覆宋五山版とされている。詳しくは佐藤秀孝・舘隆志共編『蘭渓道隆禅師全集（第一巻蘭渓和尚語録）』（大本山建長寺刊、思文閣出版、二〇一四年一〇月）を参照。

（43）『狂雲集』には蘭渓道隆が虚堂智愚を批判したことばと一休宗純の偈頌が伝えられており、

大覚禅師嘲二虚堂和尚一曰、能学二許渾詩一不レ識レ禅。作レ偈解云、曾見二無明一直近前、松源三転下二言詮一。忠言覿面没二逆耳一、天沢詩僧不レ識レ禅。（一休和尚全集二・狂雲集下・一〇二～一〇三頁）

とあり、これを柳田聖山氏は『一休（日本の禅語録十二）』においてつぎのように現代語訳（二四〇頁）している。

大覚禅師が虚堂和尚をこきおろして、「能ク許渾ノ詩ヲ学ブモ、禅ヲ識ラズ」と評した。偈つくって駁する次第。

ずばり近より、無明に参じて、松源ついたる、三題ばなし。忠告うれしや、えんりょは無用、うたよみ天沢、禅は知らない。

さらに柳田氏はこの一休宗純の偈頌に対して、

建長開山、蘭渓道隆（一二一三―七八）の虛堂評。蘭渓の語録は、寂後まもなく中国に伝えられ、虛堂が跋文を寄せている。蘭渓が虛堂を酷評した記事は、大覚禅師語録に見えぬが、虛堂と許渾を結ぶ一休の虛堂思慕は、この批評より発するとみてよい。

と解説し、つづいてつぎのように註記している。

大覚の虛堂批判は、その偈頌の妙に対するものであった。「禅を識らず」とは、禅よりも文字にすぐれるという批判だが、一休はこれを逆手にとる。

この点については詳しくは佐藤秀孝「虛堂智愚と蘭渓道隆―とくに直翁智侃と『蘭谿和尚語録』の校訂をめぐって―」（花園大学『禅文化研究所紀要』第二四号、平成一〇年一二月）を参照。

（44）晦巌法照（仏光法師、普通法師、一一八五―一二七三）の伝は『続仏祖統紀』巻上「法照法師」の章（卍続蔵一三一・三五六b～三五七a）に存する。法照は台州（浙江省）黄巌県の童氏に生まれており、天台宗の北峰宗印（元実、慧行法師、一一四八―一二一三）に師事し、大慧派の浙翁如琰（仏心禅師、一一五一―一二二五）のもとにも参禅している。皇帝の理宗や平章の賈似道の帰依を得ており、著に『法華三大部読教記』二〇巻が残されている。『中国仏寺誌叢刊』第六七冊に所収される『上天竺山志』巻三「尊宿住持品」には、

二十四代、仏光法炤法師、淳祐三年。二十五代、石室智観法師、景定三年。

とあり、晦巌法照（仏光法師）が淳祐三年（一二四三）から景定三年（一二六二）まで上天竺寺の第二四代住持を勤めていたとされる。同じく「尊宿住持品」には、

二十九代、仏光法炤法師、咸淳六年〈再住〉。三十代、鼎山時拳法師、咸淳九年。

とあるから、法照は智愚が示寂した翌年に当たる咸淳六年（一二七〇）から咸淳九年にかけて上天竺寺に第二九代として再住していることが知られる。智愚と法照は同じ淳熙一二年（一一八五）の生まれで、かなり道交も深かったものらしく、『虛堂和尚語録』巻七「偈頌」に「訪二南湖晦嵓講主一」と「寄二晦嵓仏光法師一」を収め、同巻一〇「偈頌後録」にも「寄二集慶開山一」を収めている。また『虛堂和尚語録』巻六「仏祖讃」には「霊山古雲粹法師」と「上竺栢庭月法師画像」と「宝巌崇辯訥法師画像」など天台宗の法師たちの頂相（画像）に寄せた仏祖賛も収められている。

（45）舘隆志「寒巌義尹の伝記資料―寒巌尹和尚本伝を中心として―」（『曹洞宗研究員研究紀要』第三六号、二〇〇六年三月）によって、寒巌義尹の第二次入宋時期を従来の文永元年（南宋の景定五年、一二六四）から弘長三年（景定四年）に改めている。

（46）無外義遠は閬州（四川省）の出身であり、曹洞宗真歇派の長翁如浄の法を嗣いでいる。『永平元禅師語録』の冒頭に、

非二超宗異目・慥暴生獰・峭壁乖崖・孤危嶮絶一、何足下以起二衲僧瞑眩之疾一拔中邪見枝蔓之根。在上レ古不レ乏、居レ今為レ誰。太白老

人浄禅師、奮然一出、独振二此風一。諸方憚レ之、学者畏レ之。日本元公禅師、截レ海南来、直入二其室一、向二心塵脱略処一、喪二尽生涯一。帰二坐故山一、尽レ情訐露。其徒義尹、採二摭狐涎一、欲レ為二序引一。則為レ之曰、汝師横説竪説、未三曾動二著舌頭一、莫下錯認二驢鞍橋一作中阿爺下頷上。

景定甲子十一月旦、無外義遠書。［飛髄］［翠岩尊者］

（曹全宗源下・二七a）

という義遠の序文が収められている。義遠が同門の道元の語録に序文を記したのは景定五年（一二六四）一一月一日のことである。一方、『永平元禅師語録』の末尾にも、

大海汪洋、眇無二涯涘一。嘗二一滴一、則百川異レ流、具二此滴中一。義尹禅人、不レ忘二乃師之志一、持二其広録一、需レ為二較正一。得二百千之十一一、其権実照用、敲唱激揚、具二此録中一、猶海之一滴耳。脱二略枝葉一、不レ立二孤危一、自成二一家一。趙州所謂、諸方難レ見易レ識、我這裏易レ見難レ識。予於二此老一亦云。

書雲日、義遠題。［無外］（曹全宗源下・四二a）

という義遠の跋文が収められている。書雲日と記されるのみで具体的な年月が明記されていないが、先の序文との関わりからすると、景定五年の書雲すなわち冬至（一一月二五日）を指しているものと見られる。義遠に関しては、佐藤秀孝「無外義遠の活動とその禅風」（『曹洞宗研究員研究生研究紀要』第一七号、昭和六一年二月）を参照。

(47) 退耕徳寧（?―一二六九）は破庵派の無準師範の法を嗣いだ高弟の一人であり、無外義遠と同じ蜀僧と見られる。『永平元禅師語録』の巻末には智愚や義遠の跋文とともに、

巨海風生、千波萬浪、変態無レ窮。今観二日本元禅師語一、亦猶レ是也。若是慣レ諳二水脈一、便見二浅深一、波水不レ異。豈待二風恬浪静一、舞二棹揚三帆於其間一哉。倘或未レ然、却請従レ頭探レ過。

大宋乙丑咸淳改元清明後一日、霊隠退耕徳寧。［退耕］

（曹全宗源下・四二a）

という徳寧の跋文も載せられている。徳寧は咸淳元年（一二六五）清明日の翌日三月一四日に霊隠寺の住持として跋文を寄せている。